

---

# IS VS 霊子甲冑

山上真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS VS 霊子甲冑

### 【Nコード】

N4466Y

### 【作者名】

山上真

### 【あらすじ】

ISという兵器の登場によって女尊男卑の世となった昨今。そんなある日、あるニュースが世界を騒がせる。

それを契機に、秘密部隊『帝国華撃団・花組』隊長の大神総一はある任務を言い渡される。

サクラ大戦シリーズとISのクロスです。

時代的にサクラ大戦側はオリキャラで固められています。

キャラ改変、独自解釈、捏造設定があります。

原作を読み返しつつ、ある程度書きためてからの投稿になるので不

定期更新となります。  
感想お待ちしております。

## プロローグ（前書き）

リハビリがてら書いてみました。  
楽しんでいただければ幸いです。

## プロローグ

「おおおおーっ！」

「はああああーっ！」

響き渡るは少年少女二人の咆哮。僅かに遅れ、甲高い音が断続的に鳴り響く。……見れば、二人の手にはそれぞれ刀が握られている。模擬刀かと思えば然にあらず。紛う事なき真剣である。

ISというものが世に広く浸透している昨今を考慮しても、それはおかしい光景だった。

二人の年頃はどう鼻肩目に見ても十代半ば。それでいながら、二人は己の手足の如く刀を扱っている。一心同体と言っても過言ではなかった。

であればこそ、尚のこと腑に落ちない。

スポーツとして広まっているISがその実兵器であることを鑑みれば、少女に関しては無理矢理だが説明付けることが可能だ。『長らくISと共にあり、刀を武器としている』……と。

しかし、少年に関してはそうもいかない。……何故ならば、ISは女性にしか動かせないのだ。それが絶対とは言えないが、常識として扱われているほどに可能性が低いのもまた事実。

では、この光景が示しているのは一体何なのか？

「いや、久々にいい訓練になった。礼を言うよ、桜華<sup>おうか</sup>」

「フフ……それはこちらのセリフだよ、大神総一隊長<sup>おおがみそついち</sup>？」

二人の会話の中に、その答えの片鱗があつた。

どうやら二人は軍人か何からしい。ISが兵器としての地位を占める昨今では非常に珍しいことではあるが、だとするならば両者の技量にもいくらか納得がいく。それでも、その年齢に対する疑

問は尽きないが。

「……嫌みを言うのは止めて欲しいな、真宮寺<sup>しんくうじ</sup>の姫君？」

「それは失礼。だがこれ位は許してもらいたいな？ 任務に守秘義務があるのは理解しているが、私たちの間ではそれも幾らか緩和される。隊長が長期に渡って隊を離れるというのに、副隊長の私は司令から伝えられるまでその事実を一切知らなかったのだからな？」

ジト目で言うてくる桜華に対し、総一は謝るほかになかった。

世界各国が秘密裏に連携して行っている、霊的なモノに対する都市防衛機構『華撃団』。……諜報、輸送、戦闘など様々な隊から成っており、総一は日本における戦闘部隊の隊長である。

霊的なモノに対処する以上、戦闘部隊員は強い霊力を保有していることが最低条件なのであるが、同時にそこが問題点でもあった。

世界は広く、霊力の保有者は山ほど存在している。しかし、戦闘時におけるパワードスーツ『靈子甲冑<sup>りょうしかうちゅう</sup>』を起動できるほどに強い霊力保有者となるとそうはいかない。

突然変異を除けば、ある程度血統を頼ることは出来る。事実、総一も桜華もそのクチだ。特に桜華の生まれである真宮寺家は『破邪の血統』と謳われるほどで、代々強力な霊力保有者が現れている。それでも限度というものがあり、戦闘部隊は常々人員不足に悩まされている。

強い霊力保有者は基本的に若い女性に多く、総一のように男性でありながら強い霊力を保有しているのは非常に稀だ。……歴代隊員の血統でも、男であれば霊力を持っていない、というのはザラである。

今回、総一が隊を離れていたのもそんな人員不足によるものであり、いくら慌ただしかったとはいえ、それを桜華に伝え忘れたのは明らかに総一のミスなのである。……親しすぎるが故の弊害であった。

その血統故に幼い頃から交流を持ち、互いに切磋琢磨しあつて来た二人は、大概のことを言葉にせずとも察することが出来る。

それに違わず、桜華も総一が隊を離れている事実及びその理由を察してはいた。これが私事であれば然程問題もないのであろうが、生憎と公務である。

察しは出来てもそれが正しいとは限らない以上、事実確認は必要なのだ。

今回は桜華が誤魔化したために事なきで済んでいるが、これが発覚した場合は面倒事が舞い込むだろう。司令から『頼み事』という名を借りた実質的な処罰が下される。

総一個人で済めばいいが、そんな美味い話はないだろう。何かしら周りを巻き込むハメになる。

「……本当にすまん」

それを理解しているからこそ、総一は謝るしかないのだった。

「……疲れた」

桜華と別れてから数時間後、総一は肩で息をしていた。

戦闘部隊隊長とはいえ戦闘ばかりしているわけではなく、寧ろそれ以外の仕事の方が圧倒的に多い。

まずは離れていた期間に溜まった書類仕事。それが終わったら歌唱訓練である。

古来より、歌と踊りには魂を鎮める効果があるとされている。

故に、華撃団に所属する者たちは表向きの顔として芸能プロダクションを運営している。……日本の場合は『浪漫の嵐』という名称で、総一や桜華もその例に漏れず、歌って踊れる男女混合ユニット

『BLOSSOM』のメンバーとして所属していた。

しかし、総一は個人的に歌唱を苦手としていた。周囲の評価は低くないのだが、総一自身は身体を動かしている方が好きなのだ。振り付けをしつつ……となれば話は別なのだが、ただ歌うだけとなると一気に疲労が押し寄せる。

それでも事の重要性を理解しているので、基本的に真面目な総一は文句を言うことがあまりない。……以前に文句を言ったのは、する必要のない女装を強要されたときぐらいである。

「いよう！ お疲れだなあ〜大神い〜」

不意に背後から如何にも脳天気な声が掛けられた。振り向くまでもなく、総一は声の主が誰なのか分かった。

加山雄輔<sup>かやまゆうすけ</sup>。総一の幼馴染み兼親友兼悪友であり、諜報部隊の隊長であり、『BLOSSOM』のメンバーでもある。

如何に疲れていても、誰かが近付けば流石に分かる。それでも声を掛けられるまで総一が気付かなかったのは、それだけ加山の隠形が見事であることを証明していた。

「ああ、疲れた。だから、悪いが今はお前の軽口に付き合ってやれんぞ？」

「ふむ、それは残念」

おちゃらけた様子でそう言ったかと思うと、次の瞬間には相変わった真面目な声で加山は言った。

「大神。つい先刻、IS学園の試験会場で何かが起こったらしい。これから調べに言ってくるが……俺の予想が正しければ事態は一気に動く」



まだ何が起こったのかは分からないらしいが、こういった場合の加山の直感によく当たる。

それ則ち、『面倒事の到来』である。

予め覚悟を決めておけば、いざこの身に降りかかった場合でも割と冷静に対処することが可能になる。

「……そうか。情報、感謝する」

「いいってことよ。それじゃ大神、アディオス！」

再度脳天気な声を発し、次の瞬間、加山は音もなくその場から姿を消した。

「……申し訳ありません。もう一度お願いできますか？」

加山より忠告を受けた、その数日後。

帝国華撃団司令室において、部屋の主たる司令よりある任務を告げられた総一は、そう問い返した。

内容を理解できなかったわけではない。寧ろこれ以上ないほどに理解できた。しかし、だからこそ問い返さずにはいられなかった。

任務内容を簡単に言えば『IS学園に入学し、織斑一夏を護衛。

場合によっては華撃団ヘスカウトし、他にも有益な人材がいた場合、その者もスカウトせよ』……と、こうである。

これは問い返さずにはいられない。

護衛だけならば、まあ分らないでもない。平均的な同年代の者と比べれば、自分の方が遙かにデキると自認している。剣術も修めているし、靈的戦闘ではあるが実戦も経験している。極めつけに護衛対象と同性である。護衛のしやすさを考えれば、自分がその任に

就くのは妥当と言えるだろう。

分からないのは『IS学園に入学』の部分である。自分の歳を考えれば高校に通うのは問題ない。寧ろ普通である。しかし、この部分だけは納得する事が出来ない。

織斑一夏という例外が現れたとは言え、ISは未だ女性のモノだ。……平たく言えば『IS学園』は女子校なのである。そこにどうやって自分が通えというのだ。

華撃団は任務内容が内容なだけに、通常の軍隊 日本の場合は自衛隊 と比べてもその権限は遙かに大きい。普通に考えれば分かることだが、霊的存在に対して通常の武力など役に立たないからである。

故にその権限を用いれば通えなくもないだろうが、実行できなければ意味がない。

権限を使用できるのは、あくまでも『霊的存在が認められた場合のみ』なのである。緊急事態においては独自の判断で使用することも出来るが、そんな緊急事態など滅多なことでは起こらないし、使用後に提出する書類の量がバカにならない。

そんなわけで、IS学園が実は『霊的現象を起こすことを目的とした秘密結社』でした……などといった場合でない限り、その権限は使用できないのだ。

より詳しく言えば、華撃団は秘密部隊であるために表立った階級はないが、それでも総一は平常時から少尉相当の権限を保有している。これでも充分と言えるが、霊的存在が絡んできた場合、脅威の度合いによつて左官や将官までその権限が跳ね上がるのだ。ともかく。

その事実を踏まえれば、今回の任務は自分より桜華向きである。世間における『IS学園』の立ち位置を鑑みれば、少尉相当の権限で出来ることなどたかが知れているはずだ。

また、大神総一と真宮寺桜華を比較した場合、性別の違いこそあれ、その腕前と実戦経験に大差はないという事実もある。

そして分からない点がもう一つ。織斑一夏のスカウトだ。……これは絶対ではないようだが、そこに至った経緯が見えてこない。

「うん……君の疑問はもつともだ。通常ならば桜華君の方に命じていただろう」

総一の疑問を汲み取っているのだろう。答える司令の声は柔らかかった。……元より『司令』という立場にしては柔らかい言葉を使う人物ではあるが、冷徹になるべきときはどこまでも冷徹になれる人物でもある。

それを踏まえた上でこういった言葉で返してくることを鑑みれば、真宮寺桜華ではなく大神総一でなければならぬ理由があるということだ。

そしてそれは、『当たれば儲け』的なモノではあるが、当たったときの配当が巨大であるという事実も示している。

「IS存在が今の世を形成することになったのは否定しない。……が、それが必要悪だ。……何故か？ かの兵器によって多大な技術革新がもたらされたのも、また事実であるからだ。無論、巨大な光は相応の闇を生むし、その点では見逃すことは出来ない。だが、それは何もISに限ったことではない。今回はたまたま、ISによる『技術革新』という名の光だった、という話でしかない。まあ、如何に現行兵器を凌駕する威力を持つていようと結局は物理兵器である、という点も我等がISそれ自体をそこまで危険視していなかった一因だがね。……しかし、織斑一夏の存在がその認識を覆すこととなった」

総一は司令の言葉に同意する。少なくとも、華撃団員の認識は皆似たり寄ったりだった。

それをここに来て否定するに至った。そして、その原因となった

のが織斑一夏。先の命令と今回の言葉。そこから見えてくるモノは一体何だ？ 総一は思考する。

認識を覆された、と言っている以上、ISは霊的脅威たりえるということだ。だが、真にそうであるならばもっと早くに発覚して然るべきである。しかし、織斑一夏が表立つまでそんな動きはなかった。

では、織斑一夏と他のIS起動者の違いは何だ？

織斑一夏

は男性であり、他のIS操縦者は皆女性だ。

そして、男性なら誰でも良いわけではなく、織斑一夏でなければならぬ理由がある。また、女性も起動確率が高いだけであり、その全員が起動できるわけではない。

（おいおい、ちょっと待て……。これは、どこかで聞いたような話じゃないか……？）

思考を重ね、総一はある結論へと行き着いた。

そもそも、総一が今ここでこうして話を聞いているのも強い霊力を保有しているからであり、大神家の実績によって十五の若さで隊長という任に就いているからである。

そうでなければ、『今ここでこうして話を聞いている』という事実が起こり得なかった。

そして、大神家の実績を語る上でも総一が華撃団にいる理由を語る上でも外せないのが霊子甲冑である。

霊子甲冑とは『霊力ありき』で開発されたパワードスーツだ。

時代の流れと共に使われる技術や形状は変化していったが『起動に強い霊力を必要とする』という点は今になっても変わらない。

そして一方のISだ。

ISのコアはブラックボックスそのものであり、開発者である篠ノ之束が発表した事柄以外は一切が不明。

そして篠ノ之束自身、『ISの起動に何を必要とするのか分かつ

ていない』可能性が高い。……これは当初の発表から考える限り可能性は高いだろう。宇宙空間での活動、つまりは宇宙開発をするに当たって、女性しか動かせないのでは意味がない。

なのに発表したのは、篠ノ之束の認識では『男女とも動かせる』ことになっていたからではないだろうか。そして、ここで重要なのはあくまでも『篠ノ之束の認識である』という点だ。

篠ノ之束は自他共に認める天才だ。独力でISなどというものを開発した以上、総一もその点に関しては認めている。

その一方で『自分の興味のないことにはとことん無関心』という話もある。この無関心は人間関係にも当て嵌まるらしく、自身の妹である篠ノ之箒、件の織斑一夏、その姉である織斑千冬くらいしか親しい人間はいないとも聞いている。

この、自分を含めたごく狭い範囲の四者に共通する部分があったなら、篠ノ之束は『人類全てに共通する』と認識するのではないだろうか。そして、ISの起動にこの共通部分が必要としていたならばどうだろうか。

人類全てに共通するという認識ならば、わざわざその事について考える必要もなければ説明する必要もない。その結果として世間一般での認識が『ISを起動できるのは女性のみ』になったとすれば……。

「ISの起動には霊力が必要。……違いますか？」

自身の至った結論を、総一は司令へと確認した。……その声音は冷静そのものだが、表情まではそうはいかない。驚愕がありありと浮かべられていた。

「そう……君の驚き通りだよ。簡単にはあるが織斑一夏を調査した結果、彼が男性にしては珍しい霊力保有者であることが認められた。霊子甲冑の起動には至らぬものの、その霊力値は男性として充

分に高い。そしてそこから調べられる限りのIS操縦者を調査した結果、保有量の差こそあるものの、その全員が霊力保有者であるという結果が出た。……無論、以前にもIS操縦者を調査したことはあったし、霊力を保有しているという事実も判明してはいた。しかし、調査したのは五名にも満たず、対象が何れも女性であったために『賢人機関』はスルーしていたようだ。……華撃団の求める霊力値には遠く及ばないという事実もあつたらしいけどね」

果たして、司令の答えは肯定であつた。

それが真に事実ならば、この命令も納得がいく。

男の霊力保持者は貴重であるが、そこには確固とした理由が存在する。

そもそも、霊力それ自体は万能である、というのが通説だ。しかし、実際にそんなことはない。……何故ならば『発現形質』と『霊力性質』に左右されるためである。

炎、冷気、雷、或いは瞬間移動や治癒、<sup>テレポート</sup>身体強化などが発現形質に当たり、その分類は多岐に渡る。また、人によつては複数発現できたりするが、大抵の場合は一極特化である。

そして、個々の持つ霊力の特性を俗に霊力性質という。

今は紐育の華撃団戦闘部隊である『星組』隊長の任に就いている大河<sup>たいが</sup>星<sup>せいじ</sup>司と総一は、この霊力性質が特殊なのだ。

彼らの霊力性質は『触媒』である。その性質故に、彼らは他者と霊力を重ねることが出来るのだ。

譲渡であれば、他の隊員たちもやってやれないことはない。

しかし、相乗できるのは現時点において総一と星司だけなのだ。

この霊力性質は、文字通りの万能性を秘めている。そして、未だ男性にしか確認されていないのがポイントである。

現時点で織斑一夏をスカウトしたところで即戦力には成らないだろう。しかし、その将来性は大きい。もし霊力性質が『触媒』だとするなら尚更だ。

だが、それも前提条件が間違っていないければの話である。総一がISを起動することが出来なければ、この話は始まることなくそこで終わりだ。

「失礼します。打鉄を持って参りました」

当然、そのことは織り込み済みだったらしい。……まるでタイミングを図っていたかのように、量産型ISの一つである打鉄が司令室へと運び込まれた。

「さて、論より証拠。早速確認してみるとしうか、総一君？」  
「はっ」

司令に促され、総一は打鉄へと触れた。

「ぐう……っ!？」

瞬間、ナニカが繋がった。……それが総一の感想だった。  
ISに関するおびただしいまでの情報の数々が、意識へと直接流れ込んでくる。……その影で、己を見つめる存在がいることに総一は気付いた。

（何だ……？ 俺を見ている……？ 男？ それとも女？ ……わからない。今はまだ、遠すぎる）

それは刹那の邂逅だった。邂逅と言えるかもわからない。  
次の瞬間、総一は我知らず打鉄を動かしていた。

「ふむ……どうやら推測は正しかったようだね」

司令の声に意識を浮かび上がらせた総一は、しゃがみ込んで打鉄を脱着した。……実に自然で、まるで『よく見知った物を扱っているかのよう』だった。

そして敬礼し、命令を復唱した。

「了解しました。大神総一、IS学園への入学、及び織斑一夏の護衛スカウトの任に当たります」

「うん……よろしく頼んだよ、大神隊長」

神崎重工の技術者からISについてのより詳しい話を聞いたり、ISの参考書を読んだり、表向きの仕事をしたりしているうちにあつという間に日は流れた。

（まさか此程までに偏っているとはな。男性教諭が一人もない。それも困るが、何よりも授業がIS関連に偏りすぎだ。曲がりなりにも高校なのだから、これは問題がありすぎないか……？）

現在IS学園の廊下を歩きながら学校案内を読んだ総一の感想がこれだった。

こうして廊下を歩いている以上、IS学園への入学自体は問題なく出来た。だが、ISの動作に関して問題があった。

普通に動かす分には問題ないのだが、戦闘行動を取ろうとすれば上手く動かないのだ。

これは霊力が過剰注入されるためであろう、というのが総一の至った結論である。

霊力を動力源にしているところは同じだが、ISと霊子甲冑の設計思想、設計理念は当然の如く異なっている。

霊子甲冑の場合は攻防移全てに霊力を用いるが、ISの場合は防



バリアーや絶対防御　　だけらしいところを見てもそれは明らかだ。

無論、そのままでは問題があるので対策は練った。

それに実体験から、最適化が進めば問題は解消される、と総一は踏んでいる。……初期設定時と一次移行後の動きを比べれば、そうとは思えないのだ。

異例ながら発現した単一仕様能力の存在が、その推測を後押ししてくれる。  
ワンオフ・アビリティー

もつとも、単体では何の意味もない能力だ。なにせその名前からしておかしい。『隊長』なのだ。その効果は、作戦を発令することによりISの『コア・ネットワーク』においてチーム登録しているメンバー　自分を含む　の攻防移に補正を掛ける、である。…  
…霊子甲冑で出撃しているときと然程変わりにない。

そのことから鑑みても、後は時間の問題ということである。

しかし実際問題、その時間がどれくらいなのか分からないから困りものだ。

「まあ、上手いこと立ち回ってみせるさ」

不利な状況など慣れたものだ。何せ霊的戦闘というものは基本的に後手に回るものだから……。

それを思えば、これもまた大差はあるまい。

総一には経験からくる自信と自負がある。

そして、たとえISという未知の舞台といえど、それらの経験を転用できないはずはない。

それに、正直に言えば総一は楽しみだった。

総一はその仕事柄、普通の学校に通うことなど出来なかったのだ。今までの勉強は全て華撃団の関係者に教わってきたのである。

つまり何が言いたいのかといえば、総一は同年代との付き合いに飢えているのだ。同年代の友人など華撃団の関係者ぐらいで、それ

以外は仕事上のドライな関係でしかないのである。

IS学園も決して『普通の学校』とは言えないが、それでも学校であることに変わりない。

この年齢になつての学校デビューであることも相俟つて、総一は心底から『友達百人』をつくる気である。

そうして、総一は意気揚々と教室に入つていった。

## プロローグ（後書き）

一話当たり何文字くらいが妥当なんだろうか……？  
自分の場合、最低五千字は突破するようにしているのですが……。  
お教えいただければ執筆の目安になるので助かります。

## 第1話

「いよいよですか……」

そう呟いたのは、鮮やかな金髪が映える青眼の少女であった。名はセシリア・オルコット。IS学園の新入生である。

日本に来るにあたり、セシリアにはある目的があった。

イギリスの代表候補生という立場にある以上、ISの操作能力向上とブルーティアーズのデータ取りが第一であることに違いはない。そのためにIS学園に通うことを選んだのだし、余儀なくされたのだから。

しかし、それはあくまで公人としての目的だ。私人としての目的は他にある。

私人、セシリア・オルコットの目的。それは『ある男にもう一度会う』ことである。

だが、ただ会うだけでは意味がない。会うべくして会う必要があるのだ。でなければ、名前も居場所も知っている以上、既に会いに行っている。

初めての出会いは偶然の産物だった。……ならば、その男に会うのは次も偶然の産物によるものでなくてはならないのだ。

あの男は自分の慢心を打ち砕いてくれた。だから、その点には感謝している。

しかしそれと同時に、自分のプライドをも打ち砕いてくれたのだ。だから、その点に関しては恨んでも仕方ないだろう。

あの男に抱いたのが感謝の念だけだったならば、素直に会いに行っている。しかしそうでない以上、自分から会いに行くのは我慢がならない。

そう、『偶然に次ぐ偶然』という過程を経て、今度こそ自らの言葉で己の名をあの男に刻み込み、そしてその次には『必然』として

出逢えるようにする。……それこそが、私人、セシリア・オルコットの現時点における最終的な目的だ。

「さあ、待っていなさい。わたくしは必ず目的を果たしてみせますわ。そのために必要だというのであれば、運さえも味方に付けて差し上げましょう……！」

言葉にすることで、今一度意志を確かなものとする。……セシリア・オルコットは静かに気炎を上げた。

不意に、ゾクリときた。

それを表に出すことなく、総一は静かに警戒を強めた。

霊能者であり剣術家でもある総一にとって、この手の感覚は慣れ親しんだものだった。もつとも、事が実際に起こったとて、その脅威度は千差万別であったが……。

（さて、当たりか外れか……）

視界内に織斑一夏の姿を認め、総一は心中で呟いた。

華撃団の存在を知っている政治家の中にも、当然の如くその役目を疑問視する者はいら。何せ時勢が時勢だ。『そんな曖昧なものに注ぎ込む金があるのなら、その分を新たなISの開発に回すべきではないのか』……といった考えを持つ者がいるのは至極妥当であるだろう。実際に霊的現象に対処している総一としては困りものだが。

ともあれ。

そういった考えの者たちに華撃団の有意性を示すためにも、此度の護衛任務はありがたかった。そういった考えの者たちは、華撃団

の実戦部隊を『強い霊力保持者の集まり』としか認識していないからである。

確かにそれも間違っているとはいえないが、あくまでそれは最低限の条件である。実際に配属されている隊員の多くは、何かしらの戦闘技術を修めていたり、そうでなくても優れた能力を持ち合わせている。事実、総一は二天一流を修めているし、桜華は北辰一刀流を修めている。

そこで重要となってくるのが織斑一夏である。『世界で唯一ISを動かせる男』という肩書きは強い関心を引き寄せている。実際に総一も動かせるので唯一ではないのだが。

華撃団の上層部である『賢人機関』、技術協力している『神崎重工』の上役たちは『ISを起動させるには霊力が必要』という結論に至っているが、世間一般には謎のままである現状、織斑一夏はあらゆる意味で狙われやすい。

織斑一夏を『世の男性にとって希望の星』と表せば分かりやすいだろうか。

表向きには技術的な意味で狙われやすい。現在判明しているあらゆるデータとこれから取得できるであろうデータを女性のそれと比較することで、『男なのにISを動かせる理由』が判明するかもしれないのだ。

そして女尊男卑を招く要因がISにある以上、それが分かれば男女平等にまで持ち直せるかもしれないのだ。

これは大きい。仮に科学的な理由を証明できたならば、それを発表した国は世の男性陣からの多大な支持を得られることだろう。

そして、だからこそ大半の国が身柄を確保しようとしているはずだ。

確かに、IS学園は国際規約で『学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されない』と定められている。がしかし、今現在そんなものは既に有名無実の代物と化している。

故に、今こうしている中でも、あらゆる国家あらゆる組織が動いている筈だ。

結婚などで合理的に確保しようとする分には何も問題ないわけではないが、結婚は個人の問題であるために口出し辛い。それに紛れて秘密裏に確保しようとする所も間違いなく存在しているだろう。

そして裏向きには『世界を絶望で満たす』ために狙われるだろう。得た希望が容易く無へと帰したならば、後に待つのは絶望だ。

世界の男女比はおおよそ半々。その内の半分が一斉に絶望の海へと沈むのだ。

霊的見地に立つ者としては、その後に起こることなど考えたくもない。文字通りに世界が滅んでも不思議ではないだろう。

故に、織斑一夏を見事に護ってみせれば、華撃団を疑問視する政治家たちに『華撃団は役に立つ』と考え直させることが出来るはずだし、起こり得る災厄を未然に防ぐことにも繋がるはずなのだ。

そんなわけで、このような悪寒が起こるのは、総一にとって寧ろ望むところであった。

（しかしまあ、彼も災難な事だ……）

警戒はそのまま、総一は護衛対象に同情せざるを得なかった。

織斑一夏にとって 大神<sup>じぶん</sup>総一を除き 周りの人間は全部女性。しかも席は最前列の中央……つまりは教卓の真ん前という最も目立つ位置。挙げ句の果てには向けられる視線の数々。

見ていて可哀想になるほど緊張しているのが丸わかりだ。

男という点で見れば総一も同じであるが、彼の席は最後列だ。それに表の仕事柄視線を向けられることには慣れている。それに加えて、興味本位で眺めるだけならわざわざ後ろを向くよりも前や横を見た方が楽なためか、総一に向けられる視線は想像以上に少ない。

だからこそ、総一には同情を抱くような余裕があった。

（HRまでまだ時間はある。……休み時間を予定していたが、今の内に話しておくか）

総一は席を立ち、静かに、それでいて自然に、一夏の席へと向かっていった。

「いや、君も大変だな。織斑一夏君？」

自分に掛けられたその声に対し、何よりもまず『助かった』と一夏は思った。

女性の群れの中に男子は自分一人だけという事実もあり、一夏としても覚悟は決めてきたつもりだった。しかし、所詮は『つもり』でしかなかったということだろう。これは想像以上にキツかった。

一応『HR直前に入室していらなく目立つ真似をするよりは、前もって入っていた方がマシだろう』という考えの元に早めに来たのだが、いつまで経っても視線の雨は止まない。

いい加減にどうにかなるんじゃないかと思ったところで、救いの主が現れたのだ。

誰かと会話でもしていた方が時間の経ち具合も早く感じられるだろう、と自分でも思っていたのだが、助けを求めた先 幼馴染みの少女である篠ノ之箒<sup>ひつしお</sup>に無視を決め込まれて諦めていたところでした。その喜びも一人である。

（ああ……神様って本当にいるんだな。神様ありがとう）

思わず神様に感謝を捧げてしまったが、声を掛けられて何の返事



もしないのは失礼だ、と返事を返そうとしたところで何かが引つ掛かった。

何だ

「もしもし？ 聞こえているかい、織斑君？」

と思ったところで再度声が掛けられ、直ぐに答えが出た。声が低い。声が低い女性もいるだろうが、この低さは男性のそれだ。

その答えが出ると同時、ぐるん、と勢いよく一夏は声の主へと振り向いた。

果たして、声の主は男だった。充分に美形と言える顔立ちは微苦笑を浮かべている。しかし、何よりも一夏の目を惹いたのはその佇まいだった。凜としている、と言えはいいのだろうか。ただ立っているだけだというのに、美しさと力強さを感じさせてならない。

「あ、ああ……聞こえている。悪い。男は俺一人だつて聞いてたから、驚いて反応が止まつてた」

「まあ無理もないさ。俺は他人から視線を向けられることには慣れている方だけど、それでもこれは結構くるものがある。……取り敢えず自己紹介といこう。俺は大神総一だ。君と同じく『男なのにISを動かせた』つてことでこの学園に通うことになった。動かせた理由は……有り体に言えば偶然の産物だな。『BLOSSOM』つてグループは知ってるかい？ 俺はその一員なんだけど、メンバーの一人がISを題材にしたドラマに出ててね。俺もそれに急遽端役で出るようになったんだ。まあ撮影自体はすんなり終わったんだけど、事が起こったのはその後だ。片付けを手伝ったときに偶然ISに触れたんだが、そしたら何の因果が起動したつてわけだ」

カバーストーリー  
流石に真実を言うわけにもいかず、表向きの理由を言つて総一は

笑った。

なるほど。芸能界のことなどサッパリだがそういうこともあるだろう。総一の説明に一夏は納得した。

しかし、同時にこうも感じた。『本当のことを言っているが真実は語っていない』……と。

何故そう感じたのかは一夏自身にも分からない。本当にただの直感だ。けれど別に構わなかった。

これもまた直感でしかないが、総一は信じられる、と一夏は感じたからだ。

そんなわけで一夏もまた自己紹介をしようとしたところで

「きゃあああああ！」

「まさかとは思ってたけど！」

「本当に『BLOSSOM』の総一君！？」

「サインちょうだい！」

爆発と言わんばかりに周りの女子が騒ぎ出した。

それから暫し。

総一の自己紹介に周囲の女生徒たちが騒ぎ出し、結局一夏が総一に自己紹介することなくHRが始まった。

（これは……別の意味でキツイ）

一夏は心中で呻いた。出席番号順での自己紹介。……それはいい。別に構わない。進級に伴うクラス替えがあるかは分からないが、少なくとも一年間は一緒に勉強することになるのだ。自席の周りや気になる人物を確認する意味合いでも、自己紹介というものは必要だ。しかし、この歓声は一体何だ。自己紹介でこんな歓声が上

がるものなのか。というか、他のクラスに迷惑だろう。

HR前と同じく、総一が自己紹介した途端にこの騒ぎである。

少なくとも、この騒ぎが治まるまでは一夏が自己紹介する意味がない。こんな状態で行ったところで、騒ぎに吞まれてお終いである。

（だからこそ、こうして考えてられる余裕があるんだが……）

しかしそれも長くは保つまい。程なく自分の番がやってくる。その時、自分はどのように自己紹介をすればいいのだ。……よく知らないが、総一は有名人らしい。所謂『芸能人』というやつだ。この騒ぎはそれも一因なのだろうが、何よりも総一の自己紹介の上手さが理由だろう。この衆人環視の中で、彼は如才なくやってのけたのである。真似しようにも、とてもじゃないが無理である。ひよんな事から有名人になってしまったが、そこに自分の意志は介在していないのだ。結局のところ何が言いたいのかといえば、『周りがどう思おうとも織斑一夏は平々凡々な小市民である』ということだ。

（そんな俺が、どうやってたら自己紹介を上手くやれるってんだよ……！！？）

一夏が心中で絶叫している間にも周囲には静寂が戻りつつある。いや、戻った。それと同時に、幾多もの視線が自分に向けられる。

（えーい、こうなったらヤケだ……！ やってやる！ やってやるよ！）

自分に克を入れ、勢いのままに口を開く。

「名前は織斑一夏。皆がどう思ってるか知らないけど俺はしがな小市民なんでムダに何かを期待するのは止めてくれ。ただ掃除洗濯

に関しては一日の長があると自分でも思ってるからそこら辺は頼ってくれても構わない。まあ何はともあれここに通うことになった以上最初是不慣れもあると思うが皆と仲良くやっていきたいと思う。どうかよろしく」

一夏はノーブレスで言い切り着席した。自分でも何を言ったか曖昧だ。変なことを言っただけならいいんだが……。

少しばかり余裕が戻ってきてから気付いたが、周囲は未だにしんとしている。どうやら呆氣に取られているようだ。一夏が思い至った途端に後方からパチパチという音が鳴った。

振り向く。視線の先では大神総一（カミノサウジ）がその手を叩き合わせていた。

「フム……まあ良しとしておいてやろう」

それを確認したと同時に、またも自分の後方 副担任である山田先生がいた場所、つまりは教壇 から、今度は声が聞こえてきた。しかし、山田先生の声ではない。

一夏はその声に聞き覚えがあった。いや、そんなレベルじゃない。よく知っている声だ。この『俺にのみドラの効果音付きで聞こえてくる、トーンの低い声』は、自身の姉、織斑千冬（オリハヤヒ）のものに他ならない。

至った結論に対し、そんなバカな……、と思いつつ、一夏はまるで錆び付いたロボットの如く ゆっくりと振り向いた。

黒のスーツにタイトスカート。その背はすらりと高く、ボディラインは見事の一言。胸の前で組まれた腕。その鋭い目つきは、まるで狼を思わせる。…… 思い違いでも見間違えでもなく、正真正銘、織斑千冬（オリハヤヒ）がそこにいた。

「な、んで……？」

何でここに千冬姉がいるんだ？　そう問い掛けようとした一夏の声は、しかし言葉として機能しなかった。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

目の前で交わされる会話に一夏は理解が追いつかない。だが、そんな一夏をお構いなしに状況はどんどん進んでいく。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らうのは個人の自由だが、私の言うことには従え。いいな」

千冬の自己紹介はこれ以上ない暴力宣言と同義だった。しかし、その言葉は一夏を落着かせる効果を果たした。

この『目の前に織斑千冬がいる』という現実を、ただただ一夏に納得させたのだ。織斑千冬じふんのあねの理不尽さをこれ以上ないほどに知っている一夏にすれば、諦観こじないことを抱くのは慣れたものだったのである。

だが、一夏のテンションと周りのテンションはどうやら違っらしい。総一そういちのときよりもなお凄まじい黄色い声が教室の中を飛び回っている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

心底うつとうしいという表情で千冬は毒を吐く。だというのに、女生徒の黄色い声は止まない。

「あーもうやかましい。いい加減に黙れ。騒ぎたりないんならグラウンドを十周でもしてこい」

その言葉と共に、教室内からはピタリと音が止んだ。……先程までの喧騒が嘘のようである。

「初めからそうしているバカどもが……。そら、時間は押してるんだ。次の奴、とっとと自己紹介をしろ」

千冬効果は絶大ということなのだろうか。そこからは順調に自己紹介が進められていった。

## 第2話

(さて、どうしたものかな……?)

一時間目の休み時間、総一は行動を決めかねていた。

視線の先では、ある女子生徒が護衛対象へと声を掛けている。

篠ノ之箒。織斑一夏の幼馴染みにして、ISの開発者、篠ノ之束の妹。

四方八方から見られているこんな状況では、落ち着いて話をする事など出来るわけがない。……少なくとも、加山の情報を信じる限り篠ノ之箒には無理なはずだ。

となれば、必然的にどこかへと移動するだろう。

護衛としては付いていくのが正しいのだが、総一とて情を知る人間である。

久方ぶりの再会、その上に篠ノ之箒の事情も鑑みれば、邪魔をしたくないと思うのが人情というものだ。

(とは言え、目を離すわけにもいかないから……。仕方ない。遠目に窺うくらいは許されるだろう……)

二人が席から離れたのを見計らい、気落ちしながらもごく自然に総一は起立する。

「少々、よろしいでしょうか？」

「……ええ。とは言え、ここではなんです。教室から離れませんか？」

「構いませんわ」

「では、少々歩くとしましょう」

横合いから掛けられた声に、総一の反応は僅かに遅れた。

知人である。同じクラスにいることは分かっていたが、話し掛けられるとは思ってもみなかったのだ。

だが、これ幸いと総一は話し掛けてきた人物 セシリア・オルコットを誘導する。……こんな状況だ。教室の外へと誘うのは何らおかしい事ではない。

「しかし、まさか話し掛けられるとは思っていませんでしたので……少々、驚きました」

視界の中に一夏と箒の姿を確認し、廊下を歩きながらも総一はセシリアへと告げた。

「……無理ありませんわね。お恥ずかしい話ですが、あの時のわたくしは、ただ『男』というだけで見下しておりましたから……。言い訳にしかありませんが、やはり重圧やストレスに参っていたのでしょうね。オルコット家を継いでから……つまりはたった三年会わなかっただけで、幼き頃よりの親友が男だということすら忘れておりましたもの。その事実が気が付いたときは愕然としてしまいましたわ」

そう言つて、セシリアは静かに笑った。

いい笑顔だ、と総一は素直にそう思った。

セシリアとの出会いは、以前、総一が仕事で欧州へ赴いた際に遡る。

全てではないにしろ、代表候補生ともなれば国内に限っては相応の知名度を有しているものだ。それ故に、メディアへ出てくることも少なくはない。

セシリアの場合は、見目麗しく、名門貴族である『オルコット家』の当主という追加要素もある。メディアへの露出は必然と言えた。



さて、欧州にはある実話を元にした物語が存在している。その起源は新しめで、日本でいえば太正時代に当たると言われている。

主人公は日本よりやって来た黒髪の男。ヒロインは五名で、その内訳は修道女、貴族の娘が二名、サーカス団の少女、世間を騒がせた大悪党となっている。……この六名が舞台となるパリの地で次から次へと起こる怪事件を解決していく、というお話だ。

そのタイトルを『黒髪の貴公子』というこの物語は、欧州全域で多大な人気を博している。しかし細部は非常に不鮮明で、ハッキリしていることなど紹介文に書かれてのことくらいしかない。だが、主人公とヒロインの名前も不明だからこそ自由度が高く色々なストーリーが創られており、そうして創られたストーリーが或いは加えられ或いは削られていったからこそその人気である、とも言われている。

今までにも何度が映像化されている『黒髪の貴公子』だが、またもや映像化する運びとなった。いつもと違うのは『主人公には黒髪の日本人を起用したい』という監督の強い拘りが反映されたことである。

そこでスポットを当てられたのが総一だ。

総一の聞いたところによると、当初『若い』という理由で監督は却下したかったようだが、スポンサーの面々きたおおじ フランスの名門貴族であるブルーメール家、北大路家、シャトーブリアン家、ライラック家、更には欧州全域にその名を轟かせるホワード技研、果てはイタリアでも屈指の名門、『赤い貴族』と謳われるソレッタ家と錚々たる顔触れだ。からの強い推薦に断り切れなかったとの事である。

まあ、実際に動きを見せた後は両手を挙げて歓迎されたのだが……。

ともあれ、主人公が若いのでヒロインの年頃もそれに合わせ、ヒロインの一人である『貴族の娘』としてセシリアが選ばれた。

この共演が二人の出会いである。

そして当時、総一はセシリアからどこか張り詰めた空気を感じていた。それをどうにかしたくて話し掛けたり料理を作ったりと色々やってみたわけだが、結果は芳しいものではなかった。

しかしそれがどうだ。今のセシリアは自然体であるように見受けられる。

自分にはどうすることも出来なかったが、良い方向へと向き直ってくれたのは素直に嬉しいことである。

歩きながら話を聞いている内に廊下は抜けていた。

降り注ぐ陽の光と肌を撫でる風が心地よい。

「なので大神さん、わたくしはあなたに感謝しておりますのよ？  
あの時、あなたの剣を見ていなければ……今もきつと、わたくしは慢心したままだったでしょうからね。……ええ、ですから、ありがとうございました」

そう言っ、セシリアは総一へと頭を下げた。そこにわだかまりは感じられない。少なくともセシリアにとって、この件で総一に頭を下げるのは前々から決めていたことであり、何ら厭うことはない。その一方で、頭を下げられた総一としては堪ったものではない。

総一個人がセシリアに行ったことで感謝を受けるのならば、それはそれで問題なく受け止めることが出来る。しかし、セシリアの言葉を聞く限りではどうも違うようだ。

セシリアは『剣を見て』と言った。総一が覚えている限り、セシリアの前で剣を抜いたことは一度もない。となれば、セシリアが言っているのは撮影時、或いは自己鍛錬をしている時のことだろう。……どちらにせよ、総一自身の意図はない。

撮影時のことを言っているのであれば、それは仕事だからだ。公人としても私人としても全力で臨んだが、それでセシリアに対してどうこうという意志は微塵もなかった。

自己鍛錬にしても同じ事だ。打ち合う相手がいない以上、それま

で疎かにするわけにはいかないというだけのこと。やはりセシリアに対してどうこうという意志は持ち合わせていなかった。

だからこそ、こうして頭を下げられるのは非常に困る。総一の意図するところではないにせよ、総一が影響を与えたという点では間違いがないから尚更だ。

「……頭を上げて下さい。俺個人としては、あなたに何かをしてやれたという実感がありません。無論、俺個人の感情は別として、感謝の念はありがたく頂戴します。それを固辞するのは、あなたを侮辱する行為に他なりませんからね。……しかし、身に覚えのないことで頭を下げられるのは、その、どうにも心苦しいのです。ですので、こちらを助けると思っ頭を上げてくださいますか？」

総一は困惑を隠しきれないままにそう言った。

これが加山や桜華相手であれば、もっとざくばらんに言っているのだが、彼らとセシリアの立ち位置は違うのだ。

これが公人として礼を言っているのであれば、ISの先輩ということで下手に出るのも吝かではない。だが、今回の彼女は私人として礼を言っている、と総一は受け取った。

その点を加味すれば、上から言うのもダメだし、下手に出すぎるのも良くはない。……総一にとっては何とも難しい話である。

正直、この対応で合っているかどうか自信がなかった。

「……では」

と言ってセシリアは頭を上げた。

それに総一はホッと息を吐く。事は出来なかった。……セシリアの纏う空気が一変していたからである。

「次の話へと移らせていただきますわね？ 率直に言えば、

わたくし、負けず嫌いなんです。……で、ですね？　あなたは確かにわたくしの慢心を打ち砕いてくださいましたが……それと同時にわたくしのプライドをも粉微塵に打ち砕いてくださいましたの。となれば……これはリベンジするしかないでしょう？」

そう言ってセシリアは嗤う。

ゾクリ、と総一の全身を怖気が走った。それと同時に、HR前に感じた悪寒の正体に気が付いた。

これはマズい。何をしたのは皆目見当も付かないが、この空気は桜華やシャルロットを始め、女性陣を怒らせた際のそれと同質のものだ。

（くっ……俺はどうすればいい。俺に一体何ができる。……教えてくれ、そして助けてくれリヴァイアス！）

空気に耐えきれず、総一は遠きパリの地にいる親友にしてシャルロットの義兄、リヴァイアスへと心の中で助けを求めた。……現実逃避とも言つ。

総一の経験上、このテの空気を纏った女性は厄介事しか運んでこないのだ。

「……俺に、一体何を望んでいるんだ、セシリア・オルコット？」

絞り出すように総一は言った。……最早、言葉を取り繕う余裕など持ち合わせていなかった。

「今は秘密とさせていただきますわ。まだ準備が整っておりませんので……。大丈夫ですわ。それほど時間は掛からないはずですから……」

「……了解した。皆目見当もつかないが、俺に非があるのは間違い

ないようだしな……。何であれ、甘んじて受け入れるとしよう」

諦観の念を抱いた総一が言うと同時に、二時間目の開始を告げるチャイムが鳴り響いた。

「それでは戻りましょうか」

颯爽と歩み去るセシリアを追い、総一もまた歩き出した。……一夏もまた幕の後を追っているのが、視界の端に微かに見えた。

「ほとんど全部わかりません」

二時間目の授業中、『わからないところがあつたら訊いてくださいね』との山田先生の言葉に対する一夏の返答がこれであつた。

その言葉を受けた山田先生の態度が一転し 先程まで胸を張っていた 思いつきり顔を引き攣らせたのが、総一の目にハッキリと映った。

山田先生がそうなるのも無理はない。

総一とてそこまでISのことが分かるわけではないが、それでも今授業でやっていることぐらいは分かる。

IS学園に入るに当たり、事前に参考書には目を通していいし、技術者の方からも説明を受けたからだ。……当初、件の参考書がやたらと分厚いことにげんなりとしたが、その実わかりやすく纏められており、スイスイとページを進めたのは記憶に新しい。

そして、今日は初日で今の授業は二時間目だ。……つまり、今やっているのは『初歩の初歩』という事である。

それを『わからない』と言われてしまえば、教師としては困りものだろう。

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

それでも、何とか気を取り直したらしい真耶が確認を取る。……当然の如く、誰一人として手を挙げる者はいなかった。

「な……！？ 大神、まさかお前もわかるっていうのか！？」

それを見た一夏が驚愕も露わに総一へと問い掛けた。

「いや、俺からすればこの時点で『わからない』っていうのがわからないんだが……？ 確かに仕事の関係もあつて参考書にも全部目を通したわけじゃないが、今やっているのは最初の方に載ってたぞ？ しかも結構わかりやすかったし……。織斑君も大変だったとは思うけど、俺ほど時間が取れないわけじゃなかったと思うんだが……？ 仮に参考書に目を通していなくても、政府から教育役が派遣されているはずだ。何せこの学園はそのシステム上、事前学習が欠かせない。しかしISの特性上、余程の物好きでなければ男にそれは望めない。こういう言い方はアレだが、俺や君は世の男性陣にとって『希望の星』なんだ。そして自発的な協力が得られれば、データ取りであれ研究であれ進展が早くなる。そこを踏まえれば、参考書だけ渡して『入学までに勉強しておいて下さい』なんて有り得ないんだ。事実、俺に対しても技術者が派遣されてきたし、その技術者は『織斑先生が君の教育役』だと零していたんだが……？」

困惑しつつ、総一はそう返した。……寧ろ、そうとしか返せなかった。

「そうなのか？ 俺は千冬姉がこの学園で教師をしていることすら、

今さっきまで知らなかったんだが……」

総一の疑問に一夏はそう答え、その視線を千冬へと移す。……一夏だけではなく、教室中の視線が千冬へと突き刺さった。

「ゴホン……織斑、貴様ISの参考書はどうした？」

「実は……家の掃除をしたときに古い電話帳と間違えて捨ててしまいました」

「やれやれ……仕方がない。あとで再発行してやるから目を通しておけ」

千冬はそう言って山田先生に授業を進めるように指示した。この対応は、先程までの千冬の態度からは考えられないものである。

故に、それを見ていた一同の心は一致した。……則ち『誤魔化した!』である。

「ちょっと、よろしくて?」

「へ?」

二時間目の休み時間、不意に声を掛けられた一夏は素っ頓狂な声を出した。

鮮やかな金髪が映える青眼の少女。美少女と評するに充分だが、その言葉遣いといい纏っている雰囲気といい、『いかにも』今時の女子だ、と一夏は思った。

「もしもし? 聞こえてます?」

「あ、ああ……聞こえてる。どういう用件だ?」

「いえ、特に用という用はございませんわ。……ただ、他者を知る

うと思うのなら、まずは実際に話してみるのが一番でしょう？ あな  
なたはそう思いませんか？」

同意を求められた一夏は、確かに、と肯定した。

それと同時に己を恥じた。自分は第一印象で決めて掛かれるのを嫌がっているというのに、『他ならぬ自分が第一印象で決めて掛かっていた』という事実が自己嫌悪を呼び起こす。

「悪い。俺、第一印象であんたの事を決めて掛かっちゃってた」

だからこそ、一夏は頭を下げた。……目の前の人物には困りものだろうが、こうでもしないと自分のスジが通せない。

「くう……っ！ 彼もこんな気持ちだったのかしら……？」

いきなり頭を下げられた当の本人、セシリア・オルコットは困惑し、つい一時間ほど前に自分が頭を下げた相手もこんな感じだったのだろうか、と思考した。……それが言葉として零れていることに気付かぬままに。

「あゝもう！ とにかく頭を上げてくださいな！ いきなり頭を下  
げられては、わたくしの方が困ってしまいますわ！」

ついセシリアは怒鳴ってしまった。別に怒ってはいないのだが、  
こんなのは彼女にとっても予想外である。……どちらかと言えば直  
情径行気味な彼女はイレギュラーに弱かった。

「あ、その、悪い……」

「いえ、わたくしも怒鳴ってしまいましたから……」



一夏が頭を上げたかと思えば、今度はセシリアが頭を下げた。  
暫しの後、二人揃って小さく笑う。

奇妙な静寂が教室内を包んだ。寧ろ、二人の周りに独特の空気が形成された、と言った方が正しかろう。

当然、そんな空気を許容できない者がいた。

篠ノ之箒である。

彼女は一夏に恋をしている。そして、これ以上ないくらいの焼き餅焼きであった。ついでに言えば『素直になれない』病の持ち主で、加山曰く『ツンツンツンデレ』である。

箒は正当な一夏にとっては不当である。怒りをぶつけようと席を立った。そして一步目を踏み出すと同時にそれが鳴り響いた。

三時間目の開始を告げるチャイムである。……ああ、無情。

箒は怒りを抑え込んで席に着いた。

### 第3話

「この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する。が、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとイケないな」

三時間目。教壇に立ったのはこれまでと違い山田先生ではなく織斑千冬であり、その第一声がこれだった。

その言葉を聞き、総一は教師としての織斑千冬に疑問を抱いた。確かにクラス代表者を決めるのも必要だろうが、何も授業中に行うことはない。それこそ下校時のHRで行えば済むことだ。

なるほど。確かに織斑千冬は優れたIS操縦者なのだろう。……それは総一も認めるところだ。

しかし、それが優れた教育者とイコールで結ばれるとは限らない。千冬の場合、その言動から鑑みるに軍隊の教官などであれば適正は抜群だろうが、教師としての適正は然程高くない。……総一はそう見て取った。

（織斑一夏への事前指導も行っていないようだし、この上層部は一体何を考えているんだ……？）

「はい！ 織斑君を推薦します！」

「私は総一君を推薦します！」

（ん？ 今名前を呼ばれたようだが、一体何だ……？）

考え事に没頭していた総一は己の名前を呼ばれたことで我に返り、情報を得ようと耳を立てた。

「では候補者は織斑一夏と大神総一。……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

代表者の選出か、と千冬の言葉を聞いて理解した。

代表者とはクラスの顔だ。それが周囲に埋没するようでは意味がない、と考えるのも道理ではある。そしてこのクラスには打って付けの客寄せパンダが二名存在しているとなれば、それが選ばれるのは自明の理だ。だが、クラスの顔というのはならば専用機持ちで充分に事足りる、というのが総一の考えである。

「では、俺はセシリア・オルコットさんを推薦します」

総一の言葉が、教室内に静かな波紋を呼び起こした。

「さて、それじゃあ帰ろうか、織斑君？」

放課後。唸る一夏にそう声を掛けたのは総一である。しかし、誘われた一夏としては意味がわからない。

「いや、帰るってどこにだよ？ 俺は一週間は自宅通学なんだが？」  
「……それも聞いてないのかい？ 俺という二人目が現れた事で、部屋の問題は解決しているんだけど……」

首を傾げて問う一夏に、総一は深い溜息を吐いて答えた。  
当然、わからないのは一夏である。そんな話は聞いていない。

「はあ？ それって一体どういうことだよ？」

「そうだな……？ IS学園は全寮制で、基本的に相部屋とされて

いる。……ここまではいいかい？」

「ああ。だから『男の俺を迂闊に放り込むわけにはいかない』ってんで、少なくとも一週間は自宅通学って聞いてたんだが？」

「そう、そこだ。君が男で、同室の子が女子だから問題となるんだ。だから時間を掛けて君用の部屋を用意しなければならなかった。

けど、俺という二人目の男が現れた。……なら、俺と君を同室にしていまえば問題はない。わざわざ時間を掛けて個室を用意する必要もない」

言われてみれば納得である。

しかし、一夏としてはこう言わずにはいらなかった。

「なあ……俺っておざなりにされてんのかな？」

「……………」

否定したくても否定できず、総一は沈黙を以て答えるしかなかった。

総一の沈黙に、やっぱりそうなんだな、と一夏は首をガツクリと落とした。

自宅通学する必要が無くなったのは、まあありがたいといえばありがたい。しかし、荷物は家に置いてあるのだ。これでは二度手間である。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「山田先生……？ 一体どうしたんですか？ そんなに息を切らせて」

呼ばれた声に一夏が振り向くと、そこには息を切らせた山田先生がいた。その手には何らかの書類を持っているのが見て取れた。

「えつとですね、連絡が遅れてしまったんですが織斑くんの部屋が用意されてます。当初の予定と違い大神ちゃんと相部屋となってしまうんですが……。あ、こっちの紙が部屋番号で、これが部屋のキーになります」

「ああ、それについては今し方大神から聞かされたところです。キ―と紙についてもありがたく受け取っておきます。……。それで、用件はそれだけですか？ さつさと家に荷物を取りに行かなくちゃならないんですが？」

山田先生が言いつつ、紙とキーを渡してきた。それを受け取りつつも、一夏の言葉は自然と荒くなった。山田先生が悪いわけではないとわかつてはいるが、こうも後手後手に回されてしまつては感情を抑えきれなかった。

「あう……。それに関しては本当に申し訳ないです。それで荷物についてなんですが――」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え。まあ、生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器があれば問題ないだろう」

山田先生の言葉を千冬の言葉が遮った。

千冬のジャイアニズムに関しては諦めのついている一夏である。

特に口答えする気も湧かなかった。しかし、意外な人物が否を唱えた。

「織斑先生は黙っていてください！」

山田先生である。今日一日の態度が態度だっただけに、こうもビシツと言い放つとは思ってもみなかった。……。そう思つのは他の面々も同じだったようである。一夏と総一のみならず、教室に残っていた他の生徒や千冬までもが驚きの表情を浮かべていた。

「もう、何なんですか、織斑先生！ 事前説明を行ってなければ事前指導も行っていない。挙げ句の果てには連絡の不徹底！ 確かに織斑くんは織斑先生の弟さんかもしれませんが、それでも限度というものがあります！ しかも、それに対して織斑くんに謝るでもなく上から目線のそのセリフ！ もっと言わせてもらえば生徒に対する口が悪すぎます！ ここは確かに特殊な学園ですが、それでも対外的には『高校』を謳っているんです！ 教育委員会から文句が来たらどうするんですか！ だいたいですね……………」

その勢いは、正に一気呵成と評するのが相応しかった。

よく『普段大人しい奴ほど怒らせると怖い』と言われているが、目の前の光景はそれを証明しているようだった。

そしてその光景は、一夏にとってひどく新鮮に映った。何せあの織斑千冬がタジタジなのである。

「まあ、忙しそうだし…………俺たちはお暇するでしょう」

「…………そうだな」

これ以上この場にいても、二人に出来ることは何もない。

「それでは失礼します」

異口同音に言い放ち、総一と一夏は教室から去っていった。

校舎から寮までは五十メートルくらいしかない。色々と見て回るべき施設や設備はあるが、何も急ぐ必要はない、という点で両者の意見は合致した。

折り合えずは人心地つくのが先決である。

おのぼりさんよろしくキヨロキヨロと周囲に視線をやりながらも、その足は真っ直ぐに自室への道を歩んでいる。

普通に歩くよりは時間が掛かったが、それでも必要以上に時間を取られることもなく二人は自室へ辿り着いた。

「改めて……これからよろしく、織斑君」

「ああ、よろしくな。それと、俺のことは名前の呼び捨てで構わないぜ。名字だと千冬姉と被るし、同い年の奴から君付けで呼ばれるとこそばゆくて仕方がないからな」

「そうかい？ それじゃあ、次からは名前で呼ばせてもらおうとするよ。ああ、そうそう、俺のことは好きに呼んでくれて構わないから」

与えられた部屋へと着いた総一と一夏は改めて挨拶をした。

「んで、これからどうするよ、総一？」

「まずは……荷物の整理だな。俺は問題ないはずだけど、そっちはどうかわからないしな」

「……だな。千冬姉の言葉を信じるなら着替えと充電器しかないはずだし。場合によっては、購買にでも行って足りない物を買ってこないとな」

指針を決め、二人はそれぞれに荷物の整理を始めた。

しかし、千冬の言葉は真実だったらしい。『一夏用』と書かれて部屋に置かれていたダンボールには本当に着替えと充電器しか入っておらず、整理という整理をする必要のない一夏はすぐに手持ち無沙汰になった。

ならば、さっさと購買に行けばいいと自分でも思うものの、一夏の目はルームメイトに吸い付いて離れなかった。

まず、総一は荷物から私服を引っ張り出すとすぐに着替え始めた。

……そこは問題ない。

しかし、なぜ制服の下から刀　大きさからして『小太刀』という奴だろう　が出てくるのか一夏には理解できなかった。

それだけでは終わらない。着替え終わった総一がやけに細長い箱を丁寧に持ち運び、備え付けのテーブルに載せたと思ったら、中から出てきたのはこれまた刀だったのである。当然だが、制服から出てきた奴よりも長い。扱い慣れた様子で僅かに鞘から抜き放ち、軽く目を走らせた後で再び鞘に納めた。

一夏はそれを真剣だと断定した。以前に千冬から、軽くだが真剣についての手解きを受けたことがあるのだ。見間違いでも勘違いでもなく、あれは真剣だ。

「ん……？　どうかしたのか、一夏？」

「え？　あ、いや、その……」

じっと見ていることに気付いたのだろう。総一が一夏へと問い掛けた。　しかし、一夏は上手く返せない。

「なあ、それって……真剣、だよな？」

暫く口をモゴモゴさせた後、ようやくそれだけを口にした。

「ああ、そういうことか……！　いや、すまない。そうか、そういうばそうだよな……」

一夏の言葉を聞き、総一は得心がいった様子で何度も頷いた。驚くのも当然だな、と呟いたのが一夏の耳に届いた。

「どこから説明すればいいかな？」

「いや、どこからつつわれてもな。懇切丁寧に説明されても理解で



きないと思うから簡単に頼む」

苦笑しつつ、了解、と言って総一は説明を始めた。

それによると総一の実家は剣術『二天一流』を伝えているらしく、この年で総一は免許皆伝を受けているらしい。そして総一の所属するユニット『BLOSSOM』のメンバーである真宮寺桜華と加山雄輔もまた、それぞれに剣術を修めており、暇を見付けてはその二人と手合わせをしていた。他のメンバーや事務所の人間もその事は知っており、ここ最近はずっとまれることもなかったとのこと。仮にずっとまれたところで、政府から帯刀許可を受けているので何ら問題はない。

それを聞いた一夏は慣れ親しんだ諦観の念で以て受け入れた。それもISという兵器がスポーツとして扱われている御時世である。この年で免許皆伝を受けていようと帯刀許可を受けていようと、実際のところはそう問題ないのかもしれない。

「けど、剣術を修めてるのか……」

諦観の念で受け入れた一夏だが、その点については考えるところがあった。

小学生のとき、一夏は剣を学んでいた。……それこそが箒との出会いに他ならない。

しかし、ISの登場とそれを開発したのが箒の姉、東であったことが問題だった。幼い一夏はよく分からなかったが、東が行方をくらまし、それにより箒は転校を余儀なくされた。

教えてくれる人物と、一緒に学ぶ仲間が揃って離れてしまったことにより、一夏はそこで剣を止めた。

だが、そんな一夏に転機が訪れた。

第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』決勝戦当日のことだ。千冬が決勝戦に出ることもあり、一夏は当然の如く応援に行った。

……そして、ISを使う数名からなるグループに誘拐された。

生身ではIS相手にどうすることも出来ず、恐怖に囚われたまま時間だけが過ぎていった。

十分か一時間か、それとももっとか、どれだけ時間が経ったかも分からない中、一夏はそれを見た。

騎士とも侍とも言える、桜色をした全身装甲のIS　だと思う、多分。

その手には一振りの刀を握り、そこから繰り出される剣技を以て相手を圧倒する姿。……一夏は今でもその時のことを鮮明に思い出せる。

そして、その姿に、その技に、織斑一夏は心の底から惚れ込んだ。千冬もまた決勝戦を放棄して駆けつけてくれたが、より心に残ったのは桜色のISの方だった。……これは、結果的に千冬の戦闘を一夏が直接見ることは無かったためでもある。

一夏は建物の中に閉じこめられており、桜色のISが建物内部の誘拐犯を、千冬が建物外部の誘拐犯を相手取ったのだが、それは全くの偶然によるものだった。

その証拠に千冬にも桜色のISに心当たりはないらしく、その正体不明さが『正義の味方』みたいで、一夏の心に刻み込まれたのだ。それ以降、部活こそやっていないものの一夏は再び剣を始めた。

しかし、桜色のISの動きを模倣したりしてみたものの、一人では素振りが精々。時折千冬が帰ってきてても、その細腕で自分を養ってくれている姉のことを鑑みれば、稽古に付き合ってもらうのも気が引けて頼めなかった。

自分はどれ程の腕なのか、自分はあるの剣にどれだけ近付けたのか、分からなかったものが分かるかもしれない。

「頼む、総一。俺と剣を合わせてくれ！」

気が付けば、一夏はそう言っていた。

「準備運動はこれくらいで充分だな。……それじゃあ一夏、打ってこい」

翌日、早朝。

未だ陽が上がって間もない時刻。寮の外に総一と一夏の姿があった。

二人共に動きやすい服装で、両者の手には木刀が握られている。それを構え、総一は一夏へと打ち込んでくるように促した。

「いや、打ってこいって言われてもよ……。防具も着けないで本当に大丈夫なのか？」

一方の一夏は気が進まない。剣を合わせてくれるように頼んだのは他ならぬ自分だが、防具も着けないのはいくら何でも危険すぎる。しかも竹刀じゃなくて木刀だ。

「構わないよ。ただ単に君の腕を見るだけだからな。……なら、防具など不要だ。重い防具が動きを阻害する点を加味すれば、寧ろ邪魔でしかない。そして、君と俺には未だ大きな開きがある。ハッキリ言わせてもらえば、君の剣が俺に届くとは思えない」

淡々と総一は言い放つ。

そうまで言われて黙っている一夏ではない。

（なるほど。確かに俺はお前より劣っているだろうさ。けど、だからって、そこまでナメられてたまるかよ！ 絶対に一撃当ててやる！）

一夏もまた木刀を構え

「いくぜ！」

叫び、地を蹴った。

一夏が攻撃し、総一が迎え撃つ。……それが何度続いただろう。静寂の中、木刀のぶつかる音だけが鳴り響く。

これで防がれたのは何度目だ。荒い息を吐きながら一夏は自問した。

分らない。それが一夏の答えだった。

フエイントを掛けようが、力一杯打ち込もうが、総一はアツサリと防いでみせた。

また一合打ち合い、一夏は大きく距離を取った。自分がこうも汗だくで息も絶え絶えだというのに、総一にそんな様子は見受けられない。

何でも違うんだ。単純に腕の差だけだとは思えない。しかも、アイツからは一度として打ってきてないんだぞ。既に一夏の怒りは治まっており、その心中には次から次へと疑問が浮かんていた。

「……ここまでにしよう。このままだと、これ以上続けても意味はない」

だからだろうか。一夏の耳には総一の言葉がやけに大きく響いた。

「な……！？俺はまだやれるぞ、総一！」

「ああ。確かにまだやれるだろう。だが、それだけだ」

一夏は咄嗟に叫んだが、総一は淡々と返すのみ。

「……どういうことだよ？」

「今回の打ち合い、君から言ってこなかった場合は俺の方から誘っていた。……俺にも思惑があるからな。だが、実際には君の方から誘ってきた。……何故だ？ 何故君は俺に剣を合わせるように頼んできた？ 君は一体何がしたい？ 君が剣を振るう理由はどこにある？」

それが分からない限りこれ以上続ける意味はない。……そう言つて総一は構えを解いた。

その言葉は、一夏に冷静さを取り戻させた。

冷静になった一夏は、そのまま自己の内へと潜っていく。

そもそも、自分は何で剣を合わせてくれるように頼んだ？

あの剣に、どうしようもなく惹かれた剣に、自分がどこまで近付けたのかを知るためだ。

では、何故自分はその剣にここまで惹かれたんだ？ 助かつ

たと思つたから。嬉しかったから。

本当にそれだけか？ 違う。『あの剣を身につければ、自分

もまた誰かを護れるんじゃないか』つて、そう思つたからだ。

ならば、それを鑑みて今の自分はどうか？ 酷く無様だ。

この剣で、誰かを護ることなど出来るのか？ 出来ない。こ

んな理由を見失つた剣では、誰かを護るだなんて夢のまた夢だ。

それに気付いたとして、どうすればいい？ 決まっている。

「心を静める」

いつしか一夏は、両の瞳を閉じていた。

「覚悟を決める」

そして自分に言い聞かせるように声を出す。

「誰かを護ることは、誰かを傷付けること」

木刀をしっかりと握り直す。

「それを認めて、なおも『護る』と魂で叫べ」

何度となく模倣した、その構えへと移行する。

（　護る！　）

魂で叫ぶと同時に、一夏はその瞳を開いた。

（そうだ。それでいい……！　）

一夏の雰囲気が変わったのを、総一もまた当然の如く感じ取った。  
ピリピリと空気が振るえている。

先程までの一夏とは全く違う。

これは断じて見せかけだけの变化ではない。

「……どうやら、理由を思い出したようだな。来い、一夏！ その  
剣、見事俺に届けてみせろ！」

一夏の気に昂揚した総一が叫ぶ。  
答えるかのように一夏が駆けた。  
それはさながら居合の如く。

一夏が抜き、総一が防いだ。      しかし、一夏の動きは止まらな  
い。

「おおおおお……っ！」

それは流れるような連続五連撃。只管に模倣していく中で、より自分が動きやすいように、それでいて威力が損なわれないように改良を続けた結果に至った、言うなれば織斑一夏のオリジナル独自剣技。

並大抵の者であれば、遮二無二躲そうとすれば躲せるだろう。しかし、防ごうとすればまず間違いなく防ぎきれずに敗れる。……今回一夏が放ったのはそんな連撃だった。

だがしかし、今現在一夏と相対しているのは総一だ。剣を振ってきた回数も歲月も、一夏を軽く凌駕している。

それだけに留まらず、総一は暇さえあれば他者と打ち合ってきたのだ。その結果鍛えられた見切りは、既に一線級の域に達している。故に、総一が一夏の剣を防ぎきるのは道理である。

「な……！？」

通常ならば。

高い見切りを有しているからこそ、総一は困惑することとなった。一夏の剣によく見知った流れが見えたからである。幼い頃から数えるのもバカらしいほどに打ち合い、互いに切磋琢磨しあってきた真宮寺桜華の剣が見えたのである。

桜華の剣を、総一は我が事のように理解している。だからこそ、次はどこへどのようにして打ち込んでくるのかも理解できる。それこそ、反射的に剣を合わせてしまうほどだ。

しかし、今現在総一に剣を向けているのは織斑一夏だ。……真宮寺桜華ではない。

結果、総一は二つの理由から反射行動を無理矢理に抑えつけた。

一つに、桜華に合わせた剣では一夏の剣は防げないため。

一つに、桜華に合わせた剣では一夏が防げないため。

幸いだったのは、今回総一が守勢に回っていたことであろう。もし攻勢に出ていたならば、最悪、死体が一つ出来上がっていた。

一夏の剣。桜華の影。意識と無意識の相反する命令。……様々な要因が重なり、総一は体勢を崩された。

しかし地力の差か。体勢を崩されてなお、総一は一夏の連撃を防ぎきった。

「届かなかった……か」

結果を認め、一夏は俯いた。　　遠い。総一にはまだ届かない。

「いや……」

しかし、連撃を防ぎきった当の本人が、一夏の言葉を否定した。

「え……？」

その言葉に疑問を覚え顔を上げた一夏の前で、総一の木刀が中程から折れて地に落ちた。

「ありがとう、一夏。君のおかげで、俺はまた強くなれる」

慢心はしていないつもりだった。過信もしていないつもりだった。しかし、どこかで油断はしていたのだろう。

今回は反射行動を無理矢理に抑えることが出来た。だが、仮に次があつたとするなら、その時も抑えられるかどうかは分かったものじゃない。……今回のことは、運が良かったのだ。

それを知ったからこそ、また一つ強くなれる。

そしてだからこそ、それを発覚させてくれた一夏への感謝は尽きない。

「そしておめでとう、一夏。君の剣は、確かに俺に届いた」



その顔に笑みを浮かべ、総一は自らの敗北を一夏へと告げた。

## 第4話

「へえ、セシリアって箸の使い方上手いじゃん」

一年生寮の食堂にて、セシリアの箸裁きを見た一夏は感嘆した。彼的に外国人は箸を上手く使えないイメージを持っていたのだ。

ちなみに今は朝食時である。総一、一夏、箒、セシリアの四人が同じテーブルに着いていた。

何故この四人が同じテーブルに着いているのかといえば、そんなに難しい話ではない。

まず、総一と一夏の二人は剣を合わせた後、汗を流してサッパリしてから食堂へと向かった。

その道中、同じく食堂へ向かう箒と遭遇し、一夏が彼女を誘った。箒が一夏の誘いを承諾し、三人揃って食堂へ来たのだが、生憎と席の殆どが埋まっていた。

そこで席を探す彼らに声を掛けてきたのがセシリアというわけである。

総一、一夏、セシリアの三人は今度の月曜に勝負することになっている。しかし、その空気は特に険悪というわけでもなかった。言葉数こそ少ないものの、どちらかと言えば穏やかだ。

ちなみに今朝はバイキングである。……が、それでも敢えて選んだ食事に名前を付けるとするならば、一夏と箒が和風セット、総一が野菜炒め定食、セシリアがお刺身定食といったところか。

そんな中、ふとセシリアを見た一夏が先の一言を漏らしたのだ。

「……………叩き込まれましたから」

一夏の感想にすぐには答えず、ゆっくりと咀嚼し嚥下してから、セシリアはただそれだけを口にした。

ボソリと告げられたその一言には、並々ならぬ感情が込められていた。

ここまで扱えるようになるのに、相当苦労したのだろう。 三  
者にそう思わせるほどであった。

「そ、そうか……」

「ええ。それより、時間はあまりありませんわよ。そのペースで間に合うのかしら？」

セシリアに言われ、一夏は現在時刻を確認した。  
確かにあまり余裕がない。 が、間に合わないわけでもない。

「まあ、ギリギリ間に合うだろ」

言つて、一夏は黙々と箸を動かす。  
その速度は速すぎず遅すぎず。しっかりと咀嚼しているのが見て取れた。

「しかし、叩き込まれたって誰にだい？」

今度は総一が問い掛けた。既に食器は空となっており、あとはお茶を飲み干すだけという状態だ。

「名前は北大路神楽<sup>かぐら</sup>。リーヴァ リヴァイアス・ブルーメールと共にわたくしの数少ない親友ですわ」

誇るかのようにセシリアは答えた。

「ほう？ そなたには日本人の親友がいるのか？」

驚く筈に答えたのは

「いや、北大路家は既に帰化している、フランスにその名を馳せる名門貴族の一柱だ。古くより、同じくフランスの名門貴族であるブルーメール家との親交が厚く、現時点において神楽はブルーメールの次期当主であるリヴァイアスと婚約関係にある。また、北大路の女はその家訓により代々『大和撫子たらん』とする姿勢を学ぶ。神楽自身、既に日本では見かけなくなつて久しい、数少ない現存する『大和撫子』だ。『書』、『花』、『お茶』は勿論のことだが、それより何よりその『射』が見事だ。あれは一度見たら忘れられない」

しかしセシリアではなく総一だった。しかも、その説明は内部事情にまで及んでいる。……もつとも、当の総一とて『北大路神楽』という名前だけでは判断がつかなかった。『リヴァイア』という名前が絡んできたからこそ分かったのだ。それに驚いたのは他ならぬセシリアだ。

「大神さん、あなた……何者ですの？」

セシリアがそう問い掛けるのも無理はない。

北大路家もブルーメール家も名門の貴族なのだ。一般人がそう簡単に親交を持てるはずがない。いや、仮に親交を持てたとしても、内部事情まで明かされるとは考えられない。

「何者と訊かれても大神総一としか答えようがない。ま、太正の頃を境に大神家は結構手広くコネを持つようになってな。有名どころで言えば……シャトーブリアン、ライラック、レゾン、ソレッタ、ホワード、アルタイル、神崎、花小路とかとも親交がある」

指折り数えながら名を挙げていく総一にセシリアは言葉もない。

……見れば、一夏と箒も絶句している。

「外国のことはよく分からぬが、神崎とは『神崎重工』のことか？」  
「それに花小路ってまさか『日本の政財界の重鎮』って言われてる  
あの花小路か？」

箒と一夏の問いに総一は軽い調子で頷いた。

知らない名前も勿論あるが、知っている名前は『知らない方がおかしい』というレベルである。……そこから考えれば、知らない名前も地元に行けば『知らない方がおかしい』レベルにあるのは間違いないだろう。

そんな名前を総一はポンポンと挙げていったのである。

「あ、頭が痛くなってきましたわ……」

この瞬間、一夏、箒、セシリアの中で『大神総一』得体の知れない人物』として認められたのだった。

ともあれ。

得体が知れなかつたと頭が痛くなろうと、時間は刻一刻と過ぎていくのが理である。そしてこのままでは遅刻確定だ。

ごちそうさまでした、と四人の声が重なったのはある意味で必然だった。

「しかし、行動が遅いにも程がある。やれやれ……としか言いようがない。君も災難だな、一夏」

時間が進んで昼休みである。朝食時と同じく、総一、一夏、箒、セシリアの四人が、またも同じテーブルに着いていた。

そんな中、お茶を飲んで一息ついた総一がおもむろに言い放った。  
……だが、いきなりそんなことを言われても一夏には訳が分からない。  
い。

「災難だなんて……何がだ？」

目をパチクリとさせながら、一夏は総一へと問い返した。

「恐らくは専用機のことでしょう」

言って、違いますか、とセシリアは目で総一へと問う。

総一もまた、違う、と目で返す。

「まあ、確かに……。世間一般におけるお前の立ち位置を考えれば、専用機が与えられるのは至極当然と言えるだろう。……だというのに、未だ用意されていない。しかも一夏。お前がここに来ることを強制されたのはいつだ？ それから何日経っている？」

箒もまたお茶を一口飲んでから同意した。

そこまで言われれば、流石に一夏も理解できる。

「けど、だからこそ手間取ったって事じゃないか？ 専用機つてのは基本的に国家や企業に属する人間にしか与えられないんだろ？ そこに例外を作るわけなんだから、意見の対立とかもあつたんじゃないの？」

一夏の意見も尤もだ。確かに意見の対立もあつただろう。  
だが、しかしだ。

「俺が専用機を与えられてから軽く1週間以上は経っているわけだ

が……この事実を踏まえてもそう言えるか？」

一夏に専用機が与えられるのは既に決定されていたことだ、と総一は言外に言つてのけた。

何せ総一の立ち位置は『二番目の男』である。悪く言えば予備スベアではない。

そんな総一が既に専用機を持っているのであれば、一夏もまた既に専用機を持っていなければおかしいのである。無論、これには『政府直属機関である華撃団の一員』という総一本来の立ち位置も絡んでいるわけなのだが……。

「大神さんのことが発覚したのがいつかによっても変わってきますが……仮に、用意されるのに時間のズレが発生したとしても、それは『多少』と言える程度のズレでしかないはずですわ。掛かったとしても、精々が一日二日というところでしょう。まあ、大神さんを比較対象にするのもおかしいのかもしれませんが……」

そんなことを言つて、セシリアはジトリとした目で総一へと視線を送る。確かに、と頷きながら一夏と箒もジト目で総一を見やつた。なにせ今朝の驚愕は未だ記憶に新しい。……この男なら、と三人が思つてしまうのも無理はなかった。

そんな時だ。

「ヒューヒュー、聞きましたよ総一君。何でも今度の月曜にISで勝負するらしいじゃないですかあゝ？ 確かイギリスの代表候補生と例の男の子とのバトルロイヤルでしたっけ？ 流石『黒髪の貴公子』は入学早々やるのが違いますねえ」

まるで総一を助けるかのように、横合いからそんな声が掛けられた。

向き直る一同の眼に映ったのは人好きする笑顔を浮かべた女性である。美人と言っても差し支えはないだろう。年齢は二十歳はたちを超えたあたりか。身に着けているエプロンからIS学園のスタッフであることが分かる。

その姿に驚いたのは総一である。聞いてない。彼女がここに  
いるなんてこれっぽっちも聞いてない。

「なあ総一？ この美人さんお前の知り合いか？ ついでに『黒髪の貴公子』って何だよ？」

総一を肘で突きつつ訊く一夏。……しかし、当の総一は驚愕の表情で固まっており、答えられる状態にない。

「やだもう、美人なんて照れるじゃないですかあ。ま、それはともかく……私のことが気になるみたいね少年？ 問われたならば、  
答えてあげるが世の情け。答えられる範囲でお答えしましょう！」

あ、そっちの娘たちも質問があつたらどうぞ？ と言うことでまず  
名前はカグヤ・カプリス。お察しの通り、総一君の知り合いです！  
！ より正確に言うならば……愛人？ で、『黒髪の貴公子』って  
のは欧州における総一君の通り名ね。同名映画の主演をやったこと  
に由来します。ま、上映自体はただけど、前評判だけでかなりの  
ものよ？」

一夏の言葉が聞こえたのだろう。当の女性本人が答えてきた。その  
表情はコロコロと変わり、アクションの変化も激しい。……正しく  
天真爛漫という言葉が似合うだろう。

「愛人だと！？」

「わたくしのことは説明無しですのね……。わたくしだって『蒼の  
公女』ですのに……」



聞き捨てならない言葉に叫ぶ筈。共演し、ヒロインを演じたにも関わらず、自身のことが何も説明されずに落ち込むセリア。……始めのシリアスはどこへやら。場は一気に混沌カオスの様相を呈することとなった。

「……って、誰が愛人ですか誰が！ 人聞きの悪いことを言わないで下さいよ、カグヤさん！」

「そんなっ！？ 酷いわ総一君……。あの日、同じベッドで二人朝まで過ごしたことは無かったことにするっていうの！」

「おい、総一！ こんな美人さんを泣かせてんじゃねえよ！ 男なら、言い訳せずに責任を取れよ！」

驚愕から覚め、カグヤの言葉につっこむ総一。目の端に涙を浮かべ、よよよっ、と芝居がかった動作でくずおれるカグヤ。見事に騙され、総一に対して怒鳴る一夏。 未だ混沌は終わらない。

「そんな簡単に騙されないでくれ、一夏……。ああ、何だか頭が痛くなってきた……。まあそれはともかく、カグヤさん？ 俺はただ、敢えて誤解されるような言い回しをするのを止めて下さいと言ってるんですよ。『同じベッドで二人朝まで』を否定はしませんが、それだって俺が十にも満たない頃のこと、更に言えば、甘酒呑んで酔っぱらったあなたが俺を無理矢理引つ張り込んだんじゃないですか……。はね除けるにはね除けられなかった俺の苦痛をそんな風に弄るんだったら……。俺にも考えがありますよ？ フ、フフ、フフフ……」

頭を抑え、深い溜息をつき、諭すように言った総一は、最後に壊れたように嗤った。

血統かどうか分からないが、大神に連なる男子は基本的に女難で

ある。総一と星司も例外なく女難の気が強い。

それに関して、端からは『リア充』だのなんだの言われており、実際に女性との間で起こっていることなので総一と星司もそれを認めてはいる。のだが、振り回されることが多い以上、どうしても女難として捉えてしまうのだ。

それでも『日本男児たる者、かくあるべし』と育てられた二人は、基本的に女性を尊重する傾向が強い。しかし、それにも限度が存在するのである。

抑圧された感情はいずれ爆発するのが理だ。そして、総一がこのように嗤うのは、その導火線に火がついたことを意味していた。

以前総一を怒らせたときにどうなったのか。それをカグヤは情報として知っていた。

（マズ……ッ！ 弄りすぎちゃった……！）

故に焦る。

情報が真実かどうか興味がないわけではない。正直に言えば確かめたい。しかし今は状況が悪い。

仮に情報が真実正しかった場合、ここで総一を怒らせるということは、周りで昼食を食べているだけの、何の罪もない生徒たちを巻き込んでしまうということだ。……それはカグヤの望むことではない。

ならばどうするか。考えるまでもなく答えが一つしかないことをカグヤは理解していた。

他の相手ならば分からないが、こと大神総一が相手である以上、解決方法は誠心誠意謝るしかない。

「ゴメンなさい、総一君。私が悪かったです。この通りです。……機嫌直してくれませんか？ お友達も困惑してますよ？」

見事に頭を下げられた上でチラリと上目遣いに見つめられては、総一としても怒りを抑えるしかなかった。だが、ただ謝罪を受け入れるだけでは、また弄られる可能性が高い。……と言うより、まず間違いなく弄られる。ことカグヤ・カプリスが相手である以上、この予測は絶対と言っていていいだろう。

「はあ……分かりました。ただし！ 俺たち四人にカグヤさん手製のデザートを奢ってくれるのが条件です。……これでどうですか？」

怒りを呑み込んだ総一は条件付きで謝罪を受け入れた。

ことお菓子作りにおけるカグヤの実力は確かである。些か軽い条件な気がしなくもないが、この条件ならばまた弄られたとしてもカグヤの手作り菓子が味わえるので溜飲は下げられるだろう。

「りょうかい……って言いたいところなんだけど、流石に今から作るとなれば時間も掛かるし出来合いのものでかまわないかなあ？ 別に今すぐじゃなくていいって言うんなら時間合わせて作るけど？」

「俺は出来合いのもので構いませんよ。放課後限定だけど今日からまた仕事が入ってるんで時間を合わせるのも大変ですしね」

一夏、箒、セシリアの三人も出来合いのもので構わないと答えた。三人とも、これは降って湧いた幸運であり高望みするべきではない、と考えたためである。

「それで、仕事って何すんだ？ 休日とはかく、基本的に敷地外へ出るのは禁止だろ？」

ちよつと待つてね、と小走りに駆けていったカグヤを見送り、一夏は総一へ訊ねる。……これは一夏が芸能方面に明るくないこともあるが、純粋な興味から出たセリフであつた。

「ん？ 写真撮影。流石に仕事でも敷地外へは出られないから敷地内での撮影になるけどな。……これは聞いた話なんだが、仕事の話を持ちかけたらこの経営陣は二つ返事で頷いたらしい。まあ自慢じゃないが、俺の人気もかなりのものだからな。『撮影協力』ってことで振り込まれる金額を考えたら、まず間違いなく頷くだろう」

至極当然といった様子で総一は答える。

「そんなわけで、仕事後自室に帰つてからはともかく、その前に時間を取ることは難しい。それを踏まえた上でだが……一夏、お前はこれから勝負当日までの放課後、俺の仕事中はただ只管に剣を振れ。自分の身体の動かし方さえ分かっているれば、あとはISの方で合わせてくれる。そこに理論は必要ない。『瞬間加速』イグニッション・ブーストを例に挙げると攻撃の過程にそれが必然として組み込まれているのならば出そうと思わずともISの方で発動してくれる、といった具合だ」

そこまで言つたところで、総一はひとまず言葉を切つた。そして、聞き手たる一夏が言葉の意味を理解するのを待つ。

「言いたいことはわかつたけどよ、だからって理論を学ぶ必要が無いつてわけじゃないんだろ？」

「当然だ。理論は俺の仕事が終わつた後で教えるさ。だけどお前の場合、肝心の機体が手元にないだろう？ それでどこまで理解できるか判断が付かないんだ。……ほら、よく『体育会系』とか『文化系』とか言つじゃないか？ それと同じだよ。『文武両道』のヤツもいるが、大抵の場合はどちらかに偏っているからな……。けどま

あ、見た感じお前は体育会系だと思うから剣を振ることを勧めてるのさ。実際に誰かと打ち合うなり想像上の相手と打ち合うなりやり方は任せるけど、ただ闇雲に振るだけじゃ無意味だからな？ 相手の動きに自分はどうか合わせるか、自分の動きに相手はどう返してくるか、ありとあらゆる状況を模索して振るんだ。それが集中力の増加にも繋がるし、視野の拡大にも繋がっていく。……ただ、これは諸刃の剣でもあることを言っておく。こういう事をしていた場合、本質が兵器であることも相俟ってISを道具として見かねないんだ。確かにそれも間違いじゃないが、今日の授業で教わったようにISは『意識』と呼んで差し支えないものを持っている。つまりは純然な道具じゃない。相棒<sup>パートナー</sup>なんだ。ISを動かす際にはそのことを忘れるなよ？」

総一がこう言ったのには根拠がある。

そして、その根拠こそが霊子甲冑だ。

霊子甲冑の起動には強い霊力を必要とするが、実のところそれだけではスムーズに動かない。何故なら、霊力とは言わば『精神エネルギー』でありカタチを持たないからである。

故に、霊子甲冑には操縦者の負担を軽減させるために、この『力タチのない力』を『物理エネルギー』に変換する機関が組み込まれている。それを『霊子力エンジン』という。

この霊子力エンジンを形成する大きな要素が『霊子水晶』と『霊子反応基盤』。別名『霊力反応基盤』である。

霊子甲冑の起動は三つの段階に分けられる。

第一に、操縦者の霊力を霊子水晶が物理エネルギーである『霊子力』に変換、増幅する。

第二に、霊子反応基盤によって霊子力を安定化させる。

第三に、この安定化した霊子力を霊子力エンジンが受け取っているのである。

この一連の流れを『霊子力循環システム』と称している。……も

し操縦者の霊力だけで霊子甲冑を動かそうとすれば、この一連の流れを操縦者だけで行わなければならず、相当の潜在能力が求められると同時に多大な負担が掛かってしまうのだ。

さて、霊子力循環システムの中で問題となるのが霊子水晶と霊子反応基盤である。

まず霊子水晶だが、文字通りに水晶なのである。これは偶然から発見されたものであり、その特性もあつて数が少ない。人工的にも精製できるのだが、その効果は天然物には遠く及ばないのが実状である。

次に霊子反応基盤だ。一定以上の霊力がないと反応せず、霊子水晶が変換、増幅した霊子力を安定域まで持つていけないのだ。安定域まで持つていけないということは霊子力エンジンが起動しないということであり、つまりは霊子甲冑が起動しないということである……霊子甲冑の起動には強い霊力が必要、というのはここから来ているのだ。

それだけでも問題なのに、これらは独特の『波長』を持つているのだ。これには諸説あり、霊子水晶が持つているという説もあれば、霊子反応基盤が持つているという説もある。

そして、この波長を『心』と言い換えることもあり、これを重ね合わせなければ霊子甲冑は本来の力を発揮しないのである。

これこそが、総一の語った根拠である。

確かに霊子甲冑とISは別物だ。その設計思想も設計理念も異なっている。……だが、それでいて似ている部分が多いのだ。

現に、それを証明するかのような事も起こっている。……ISに初めて触れたときには自分を見つめる存在を、霊子甲冑に初めて触れたときには自分に呼び掛ける声を、総一は感じたのだ。

それこそがISと霊子甲冑の似て非なる部分であろう。『心』と『意識』、『声』と『視線』……確かに違うものである。そして同時に、純然たる道具には必要がない、という点で共通しているのだ。

「……なるほど」

総一の言葉にも一理ある、と一夏は思った。全面的に正しいとは思わないが、それでも自分の場合として捉えるならば理に適っている。第一、あのサッパリわからない授業のことを鑑みれば、理論を学んだところで理解できるとは思えない。……ああ。確かに自分は体育会系だ。

「……そうだな。他の奴はどうか分からないけど、俺の場合はお前の言葉通りにするのが一番だと思う」

瞑目し、考えを纏めた一夏は頷いた。

「箒！ 放課後、時間は取れるか？」

「あ、ああ……。問題ない」

一夏の言葉に箒は頷いた。

昨日話したときには見えなかった真っ直ぐさが、炎が、今の一夏には見える。

これでこそだ、と箒は思った。

「……なるほど。織斑さんもまたサムライだったということですか……。フフ、大神さんにわたくしの舞を刻み込むことが出来ればそれでいいと思っていましたが……。考えが変わりました。織斑さん？ あなたにも私の舞と名前を刻み込んで差し上げます。ですから、その返礼としてあなたもまた、あなたの武と名前を私に刻みつけてくださいませ」

微笑を浮かべ、セシリアが言った。

それは宣戦布告にして挑発だ。

バトルロイヤルをする事になったとはいえ、セシリアの目に敵として映っているのは総一だけであり、一夏は添え物でしかなかった。……それが、つい先刻までの嘘偽り無いセシリアの本音だ。

しかし一夏の言葉が、その身から発せられる気迫が、セシリアの考えを覆した。一夏もまた自分の敵として捉えるに相応しい相手である……と。

そして、敵には全力でぶつかるのが礼儀だ。

だからこそその宣戦布告。

同時に、自分の見立てが間違っていない証明が欲しい。それ故の挑発。

「ああ、見せてやるよ。未熟なことこの上ないが、それでも今の俺に出来る最高の剣をな……！」

「今度の勝負はあくまで試合であって死合デュエルじゃない。……なら、精一杯楽しんだ方が得策か。よし、期待に添えるかどうかは分からないが、俺の剣も披露させてもらうでしょう」

「わたくしは剣を学んでいないので心苦しい気がしなくもないのですが、この国では『舞は武に通ず』という言葉があると聞き及んでおります。……ですから、わたくしは舞を披露させていただきますわ。どうか心ゆくまで楽しんでくださいませ」

三者の視線が交わり、見えない火花が宙に散る。しかしそれも一瞬のこと。

「はい、お待たせ」

届けられたデザートを前にしては、そんなことを続けたところで何の意味もなさない。

「まあそれはそれとして……」



「今はこれを片付けるのが先決」

「……だな」

「いただきます」

口々に言い、一同はカグヤの手作り菓子を頬張った。

## 幕間：真宮寺桜華 1

「……今、なんて言った？」

総一がIS学園に入学したその翌日のことである。夜遅く 深夜といっても差し支えない時刻に掛かってきた総一からの電話。その内容を聞いた桜華は普通に問い返した。

「だから、織斑一夏に剣を教えたことでもあるのか？」

どうやら聞き間違いではなかったらしい。桜華は思わず溜息を吐いた。

「ああ、いや、言い換えよう。そもそも、織斑一夏とは一体誰だ？」

桜華の世界は非常に狭い。総一や加山を始めとした一部の例外を除き、一切の興味を持たないのだ。

有ろうが無かるうがどうでもいい。いてもいなくても構わない。それらの有無で桜華の世界に影響など出ないのだから……。

仕事上接する必要がある相手であっても、桜華にとっては記号でしかない。だからこそ、そんなモノに好意を抱くこともなければ嫌悪を抱くこともない。ただ与えられた仕事、言われたことを淡々とこなすだけだ。……それはさながら機械の如く。

しかし、だからこそ桜華の評価は高かった。何故なら、桜華の行動は確かに機械のそれであるが、真実機械ではない。感情も持っていれば、その表し方も分かっている人間なのだ。

喜び、哀しみ、怒りといった感情を、桜華は求められたとおりに表すことが出来る。……周囲に無関心だからこそ、逆に素直に表すことができるのだ。……それが真宮寺桜華という人物である。

そしてそれ故に、桜華がまともに認識していることなど数少ないのが実状だった。

たとえ『織斑一夏』が世界で一躍有名になろうとも、そんなのは桜華にとつてどうでもいいことなのである。

「ああ。そうだな。お前はそういうヤツだった。……織斑一夏は護衛対象だ」

「……なるほどな」

言われてみれば、そんな名前だったような気がしなくもない。

多分に呆れを含んだ総一の言葉に、記憶を整理しつつ桜華は頷いた。

「それで？ どういった経緯で私がそいつに剣を教えたなんて素っ頓狂な話が出てきたんだ？」

桜華が問い返すのも至極当然である。

桜華はその無関心さも相俟って、自発的に動くことが少ない。

それでも、自分の世界に関わることなら寧ろ積極的に動くし、請われた場合も素直に聞くだろう。

前者の場合ならまず忘れることなどないし、後者の場合でも事実の有無くらいは覚えている。

しかし、今回の総一の話はどちらにも該当しないのだ。

「そうか……。いや、実は今日の朝、彼と剣を合わせたんだ。……最初の内はそうでもなかった。軽い挑発に乗って乱れるほどに、彼の剣は軽かった。暫く打ち合ってもう充分かと思った。それでも『もしかして』という思いが拭えなかったから理由を思い出すように促してみたんだ。……そしたらまあ、激変したよ。まさしく雲泥の差だった。思いがけず昂揚したよ。……しかし、本当に驚いたのは

その後だ。彼の剣によく見知った流れが見えたんだから……。そう  
うだ。桜華、お前の剣だよ」

いや、あの時は本当に焦ったよ。　そう言っつて総一は言葉を切  
った。

そう言われれば、桜華としても興味を惹かれる。……なにせ、他  
の誰でもなく大神総一が断言しているのだ。

「そいつの顔写真とかはあるのか？」

「俺は持ってないな。それに時間も時間だ。これから写メを撮って  
送るにしても、鮮明とは言い難いものになるだろうから……。寧  
ろ加山に頼んだ方が確実だと思うぞ？」

「……そうか。なら、加山に頼んでみることにしよう」

「それがいいさ。それじゃ、お休み。夜遅くにすまなかった」

「気にするな。私としてもお前の話は興味深かったから……。お  
休み」

電話を切り、桜華は横になる。……その顔は知らずの内に笑みを  
浮かべていた。

「待たせたな、桜華。……これが、今朝方頼まれた織斑一夏に關す  
る資料だ」

「すまん。手間を掛けさせた」

お昼のことである。所属事務所『浪漫の嵐』の食堂にて昼食を取  
っていた桜華の前に、いくつかの封筒を持った加山が現れた。見れ  
ば、封筒にはそれぞれ名前が書いており、どうやら本人だけでなく  
その関係者の資料も持ってきたようである。

これは素直にありがたかった。一方向からでは分からないことも、多方向から見ることとで分かることがあるのは確かな事実である。

加山の配慮に、桜華は素直に礼を告げた。

「いいてことよ。……だが正直な話、一体どうしたんだ？　こ  
う言っちゃあ何だが、お前が他人に興味を示すなんて相当だろう？」  
「昨夜、総一から電話があつてな……。その時に言っていたんだが、  
そいつの剣に私の剣が見えたらしい。しかし、生憎とこちらには覚え  
がない。だが、他ならぬ総一が言ってるんだ。……気のせいと聞  
き流すには、些か問題があるだろう？」

「むう……。そいつあ確かに……」

加山が唸るのを眺めながら、桜華はおもむろに封筒の中から資料  
を取り出す。

「ああ。ちよい待った。一応、機密書類も入ってるんで……。こ  
こで取り出されると問題がある。部屋に帰った後にでもゆっくりと  
調べてくれ」

取り出そうとした。

「ふむ。確かに」

加山の言っていることは尤もである。これはあくまで華撃団の有  
する資料だ。また、いかに『浪漫の嵐』がその隠れ蓑であつたとし  
ても、当然ながら関係者ばかりで運営されているわけではない。華  
撃団には関わりのない、その存在すら知らぬ一般人も務めているの  
だ。

そしてここは食堂である。一般人の目というならば、ここほど触  
れそうな場所もない。

「では、私は部屋に戻る。何か思い出したら連絡するよ」

「おう。……つてもまあ、気のせいですめばそれが一番楽なんだがな」

「違うない」

資料を脇に抱え、食器を返却口に戻して、桜華は自室へと向かう。……その足取りは、存外軽いものだった。

「こいつが織斑一夏……か。確かに見覚えがあるような気もするが、これだけだとな……」

部屋に戻った桜華は、早速資料を取りだした。そして、まずは添付された写真に目を向ける。……しかし、その結果は芳しいものではなかった。

まあ、それも当然である。桜華が気に留めていなかっただけで、織斑一夏の姿はニュースや新聞を始めとした様々な媒体で流れたのだ。……視界に映る回数が多ければ、その分だけ記憶に留まるのも必然である。

写真から記憶を洗うのには見切りをつけ、桜華は記された情報に目を通す。

出身、経歴、家族関係、交友関係……一通り読み進めてみたものの、やはり記憶に引く掛かるものはない。

しかし、備考欄に気になる一文を桜華は見付けた。

何でも『二年前のある時期を境に、公園などで素振りをする一夏の姿が度々見かけられるようになった』らしい。……ここがポイントだろう。それまでと異なる行動を取り始めたということは、その『ある時期』に何かがあったことを示している。

華撃団で用いる資料形式の場合、備考欄には噂から何か取り留めのないことも記載するのが通例だ。文字通りの備考であって、その信憑性はハッキリ言えばアテにならない。

だが、今回ばかりは別だろう。少なくとも『剣』という部分で総一の言葉と合致する。

「チツ……」

桜華は思わず舌打ちする。……幾つかのキーワードは見つかったが、肝心の部分が分からないのだ。

「仕方ない、と言えば仕方ないのかもしれないが……」

深呼吸をして幾らか気分を落ち着けた後、桜華は呟いた。そして思考する。

なにせ織斑一夏は極々普通の一般人だったのだ。……自然、これらの情報の大半は一躍有名になってから掻き集めただろうことを意味している。いくら姉や交友関係者が有名人だとて、当時の織斑一夏本人はその限りではないのだ。それでも、有名人の関係者だからこそこの短時間でここまで情報が集まっているのだろう。……また、この備考欄に書いてあることからして、そもそも転載の可能性が高い。いくら何でも、今から二年前の噂を集めるなど不可能に近いからだ。

「そうか、転載か……！」

思考を重ねた末その可能性に思い至った桜華は、すぐさま別の資料に目を通す。

果たして、姉である織斑千冬の資料にも気になる情報を見付けた。

「第二回IS世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦を突然辞退。その後、ドイツ軍で教官を務める……か」

突然の辞退だけならば、考えられる可能性は様々にある。……しかし、誰もが辞退の理由を知らず、それでいて唐突にドイツ軍で教官を務めるとあらば、『何かあった』と声高に叫んでいるようなものだ。

そして、桜華は『モンド・グロッソ』の時期と、ある事件の時期が重なっていることに思い至った。

「加山か！ 二年前、私が遭遇した『騎士団<sup>ナイツ</sup>』に関する資料を持ってきてくれ！ 時期はISの『モンド・グロッソ』辺りだ！ もしかしたらもしかするぞ……！」

すぐさま加山に連絡を入れる。

「……！？ 了解した！」

桜華の勢いに吞まれたのか、電話に出た加山は最初こそ絶句していた。しかし、すぐさまその意味に気付いたのだらう。それだけを言って通話を切った。

それから暫し。桜華の部屋のドアがノックされた。

「入ってくれ」

「失礼する。……すまない。思いの外時間が掛かった」

入室するなり謝罪してきた加山に対し、気にするな、と桜華は座るよう促した。……確かに時間は掛かったが、それでも突然の要請に対するものとしては十分に早い。

桜華は加山の持ってきた資料を受け取るも、それをすぐには取り



出さない。

それに目を通すよりも先に、そうなるに至った経緯を説明するべき、と考えたためである。

すぐに確認したい気持ちも確かにあるが、飛躍しすぎている可能性も否めないのだ。

それならば、加山にも意見を伺った方が良い。『隠密・諜報部隊』である『月組』の隊長を務めていることもあって、加山は情報の扱いに慎重だ。

「私が気に掛かったのは……このこと、ここだ」

桜華の指した部分に加山は目を向ける。

「これは……。すまない。もう少し待っていてくれ。俺も思い出したことがある」

言うなり、加山は退室した。……それを怪訝に思いながらも、桜華には待つことしかできない。

そして、再度ドアがノックされる。

促せば、また別の資料を持った加山が入ってきた。

「それは？」

「『森羅』に関する資料だ」

桜華の問いに重々しく加山が答える。

「おいおい……。まさか『騎士団』だけじゃなくて『森羅』まで関わってるって言うのか？」

頭を抑えて桜華が呻く。

世界規模で活動している秘密結社。……それが『騎士団』と『森羅』である。

その目的が一切不明なこと、そして隠匿性が非常に高い点で両者は共通していた。……しかし、両者は別に仲間というわけではなく、時に協力し時に敵対している関係だ。

「直接関係しているかどうかまでは分らん。……あつた。ここだ」「なになに……。未確認。ドイツ。某月某日、議会にて投棄されたはずの案件が正式な認可を受けて施行されていることが発覚。認可書類には強く反対していたA氏 安全のため実名記入を避けるのサインもあつた。しかし、A氏にはサインした覚えなどなく『森羅』の『言霊使い』によるものとみられる。後日調査をしたが、『森羅』が関与した形跡は何一つとして発見できなかった。……つておい、これ十年以上前のことじゃないか。今回のことに関係あるのか？」

加山の指した部分を読み進めた桜華は、胡乱氣に問い返した。

「それだけなら何とも言えんが、こつちも加えればどうだ？」

次に加山が示したのは千冬の資料であつた。……より詳しく言うならば、千冬が教官を務めた部隊に関する資料である。

「……なるほどな」

桜華は加山の言葉に同意した。二つの資料が重なったのである。

「いつのまにか施行された『人造兵士生産計画』。それによって生まれた兵士が、今度は十年以上の時を経て『織斑千冬』の教導を受ける……。か。フン、出来すぎにも程がある。そして」

言いつつ、桜華は『騎士団』の資料を取り出し目を向ける。

「こいつも加えればもつとだ」

二年前、桜華が関わった『騎士団』の事件。

桜華は思い出す。二年前の出来事を……。

大半のものには無関心な桜華でさえ未だ忘れられずにいる、ある男のことを……。

自らを『疾風』と称した、『騎士団』の戦士を……。

仕事で訪れたその街を散歩していたときのことである。桜華は一人の男に目を留めた。……それは本当に珍しいことだ。

確かにその男は全身で『自分はいま不機嫌です』と言い表さんばかりの態度を取っていたが、それだけなら桜華は気にすることもない。

しかし、現実として桜華はその男に目を留めている。……桜華自身気付いていなかったが、その男には目を留めるだけの意味がある、ということを表す行為だったのである。

男も目を向けられていることに気付いたのだろう。面倒くさげにその目を桜華に向け

「ハッ……！ こいつは重畳だ！ 悪いが……ちつとばかり付き合ってもらつぜ、『桜色<sup>ホーリー・ピンク</sup>の魔被士』さんよおっ！」

直後に態度を一変させた。嬉々として言い放つなり、その男は桜華へと迫る。

「な……！？」

桜華は驚きつつも、遮二無二その一撃を回避した。アイドルという仕事をしていれば、性質の悪いストーカーに出会うこともある。……故に、街中で飛びかかれるだけならば 珍しいと言えは珍しいが 桜華には経験があった。

しかし、流石にこれは初めてだった。

飛びかかる間にも、男を包むように鎧が形成されたのだ。世を騒がせているISとも違う。……どちらかと言えば霊子甲冑に近い。

「何だお前は？ ついでに言つとその鎧は？」

即座に身を起こした桜華は、いつでも抜き放てるように刀を構え油断無く問い掛ける。

「ハ、流石だな。本気じゃなかったとはいえ、今の一撃をよく躲したもんだ。……とは言え、確かに今の行いは俺に非がある。すまなかったな。気の乗らねえ仕事でムカついてたところだったんだ」

男は桜華に賞賛を浴びせ、直後に謝罪した。……頭を下げることはしなかったが。

「では、名乗らせてもらおう。俺は『騎士団』が一人、ゲイル。『ホロウ・メール虚ろな鎧』・『シルフィード』を纏いし……疾風だ！」

言うなり、男 ゲイルは再度桜華へと向かう。その手には刺突<sup>ピタ</sup>剣。『疾風』を称するのは伊達でないということか、その速度は先程よりも尚速い。

「チツ……！」

桜華は舌打ちし、跳躍。この速度を前にしては、たとえ相手の刺突剣を弾くことが出来てもはねられてしまう。

「良い判断だ！……だが、甘えっ！」

並外れた速度だというのに、ゲイルもまた即座に跳躍。勢いのままに蹴撃を放つ。……その姿には、何ら負荷をおった様子が見られない。

「が……っ!？」

桜華は愛刀『荒鷹』で直撃を防いだものの、如何ともし難く吹き飛ばされる。

「チッ……。やりすぎちゃったか……？」

それを見て、ゲイルは落胆したように舌打ちする。

「うお……っ!？」

その直後、走る斬撃にはね飛ばされた。

「ってゝな、おい！一体何だっただ……？」

ゲイルは首を傾げる。確かにあの斬撃は払った。……しかし、刃が素通りしてしまったのだ。

「破邪剣征・桜花放神。自らの狙ったものにだけ威力を伝える、『破邪の剣』の初伝だ。……少なくとも、これが出来なきゃ『靈剣・

荒鷹』に認められることはない。……情報不足だったな?」

言いつつ現れたのは桜華だ。服は所々破け、血も流れているが、その足取りはしっかりしている。

「さて、許可は下りた。……お前が『虚ろな鎧』とやらを纏うなら、こちらにも纏わせてもらおうとするさ。霊子甲冑をなあつ!」

時代の流れと共に進展する技術は、過たず霊子甲冑にも適用されている。その中でもISに用いられている量子格納技術は特に大きい。流石にそれそのものはISコアに組み込まれているので用いられていないが、着眼点として多大な恩恵をもたらしたのだ。

ISを独自の力で開発した篠ノ之束は確かに天才である。

彼女に比べれば、華撃団の整備陣・開発陣は劣っているだろう。

……しかし、個人としては劣っていても、総体としては決して劣っているわけではない。

それがここに証明される。

桜華の咆哮に答えるかの如く、足を、腕を、そして頭部を……身体全体を光が包む。それは徐々に薄まり、完全に光が消えたとき、彼女の全身は桜色の鎧に覆われていた。

「さあ、戦ろうか? 先刻までのように楽にいくとは思うなよ?」

「フン……上等だ!」

時に地面を、時に壁を、時には中空さえもを足場にして二人は打ち合いながら移動する。

「おい! お前……どうして手を抜いている?」

打ち合いながら、桜華は問い掛ける。……桜華はそう言うが、ゲ

イルの刺突はまさに閃光の如しだ。端からはとても手を抜いているようには見受けられない。

しかし、桜華の言葉は正しかった。……ゲイルは特段、攻防に手を抜いているわけではない。それでも、その意識はこの戦闘だけに向いているわけではなかった。

必倒の意志がない。必殺の意志がない。……それは、手を抜いているのと同義である。

「言つたろ？ 気の乗らねえ仕事でムカついてたつてよ。……『騎士』ってのは忠誠誓つてナンボのもんだが、それだけじゃねえ。民を、力持たぬ弱き者を護ることもその本分だ。上が何を考えてやるのかは知らねえが、今回の仕事はその弱者を巻き込むことだ。……それが俺には我慢ならねえ。だが、諫めの言葉も届かねえ。こうなつちまうと、立場上、俺自身にはどうすることも出来ん。……出来んが、だつたらどうにか出来るヤツを放り込みゃあ良いだけの話だ」

「……なるほど。つまり、私はお前の怒りの捌け口にされたと同時に厄介事を押し付けられるわけだ。まったく面倒な……。だが、まあ良いだろう。お前みたいなヤツは嫌いじゃない」

「助かるぜ。……これからお前を飛ばす。あとは上手いこと頼んだぜ？」

剣を打ち合いながらの、その会話。『騎士団』と『華撃団』という、本来ならば敵対関係にある者同士の会話として、それは奇妙な会話だった。

この短時間で友情など生まれるはずがない。信頼など出来るはずがない。……それでも、互いが互いにそういったモノを感じていることは事実だった。

「いくぜ！」

「ああ」

ゲイルの蹴撃を足場に、桜華はその建物へと突撃。  
そして中にいたヤツらを片付けて

「ああ。思い出した。そうか、あの時の少年か……」

「……と、言うことは？」

「そうだ。二年前の『騎士団』事件の際、幽閉されていたのが織斑一夏だ」

「分かった。この件は俺から司令に報告しておく」

加山を見送りながら、桜華は決めた。

「明日……は無理だから明後日か。織斑一夏に会いに行ってみるでしょう」

呟き、桜華は惰眠を貪ることにした。

「すまないが、織斑一夏君……であつてるかな？」

IS学園へと赴いた桜華は、その生徒へと問い掛けた。

「はあ……？ 確かに俺は織斑一夏ですけど……」

返事は肯定。……それを確認した桜華は話を進める。



「総一から話を聞いてね。もしよければ、これから手合わせしてくれないか？ …… ああ。自己紹介がまだだったな。私は真宮寺桜華という」

「ああ……！ 聞いてます、聞いてます！ 何でも北辰一刀流の免許皆伝だとか！？」

「ははっ、君は面白いな。真っ先に出てくるのがそっちか。大抵の場合、仕事の方で驚かれるんだが……。まあそれはともかく。都合はつくかな？」

「ええ、大丈夫です。いつも手合わせをお願いしてるヤツが部活に強制招聘されてしまったんで、正直どうしようかと思ってたんですよ。……手頃な場所に案内するんでついてきて下さい」

一夏の後を桜華は追う。……道中、特に会話らしい会話もない。

「そら、どうした？ どこから打ち込んできて構わないぞ？」

実に気楽に桜華は言う。その立ち姿はまさにぞんざい。構えらしい構えも取っていない。

その一方で、一夏はまったく動けない。動く様子がない。……動きたくても動けないのだ。

目が霞む。冷や汗が止まらない。歯が力チ力チと音を鳴らす。

そう、桜華の放つ殺気に一夏は完全に吞まれていた。

これには桜華の気性も関係している。

基本的に桜華の戦闘は殺るか殺られるかだ。剣を執る理由が理由なのだから、こればかりはどうしようもない。

仲間内で手合わせをする際にはその限りでないが、基本的には殺気全開である。

「ああ、そうか……。これならどうだ？」

その事実には、桜華自身ようやく思い至ったのだろう。

仲間の中でもデキない方に分類される相手との手合わせを思い出しながら、桜華は静かに殺気を弱める。……消すのではなく弱めるのがポイントだ。完全に消してしまえば、耐性がつくことも無いからである。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

地面にへたり込み、一夏は荒く息を吐く。      まだ若干息苦しい

けど、今のに比べたら万倍マシだ。

「はあ……はあ……いま……のは？」

呼吸を繰り返して、ある程度落ち着いてから一夏は訊ねる。      生

きた心地が、まったくしなかった。

「すまないな。つい、いつものように殺気を全開にしてしまった」  
「そう……か……いま……のが……」

その返答を聞いて、一夏は納得した。      筈との手合わせとは違う。総一と手合わせしたときよりもなお空気が重苦しかった。今の殺気だというのなら、それも当たり前か……。

「どうする？ 止めておくか？」

「いや、続ける。さっきの殺気に慣れさせてくれ……」

「……分かった」

自身では面白いことを言っただけだが、どうやら外してしまっ

たらしい。呆れたように頷く桜華を見て、一夏は思った。

それからは、ただ時間だけが過ぎていく。

時折、遠くから部活のものと思しき喧騒が聞こえてくる。

場面だけを見れば、実に長閑な一刻だ。

しかし、その実態はまるで違った。

一夏を見ればそれが明らかである。その冷や汗は、治まるどころかゆっくりと勢いを増していく。

そう、一夏はまるで殺気に慣れていなかった。

だが、それは一夏の問題ではない。様子を見つつ、桜華が徐々に殺気を増しているからである。

桜華自身このようなまどろっこしいやり方など好みではないが、出来ないわけでもないのだ。……ならばやらない理由など無い。

戦闘という御馳走を頂くための事前準備だと思えば、この程度はまるで苦にならないのである。

そして

「すみません。待たせました」

自身でも知らぬ間に、一夏は桜華の殺気に完全に慣れてしまっていた。

それは、普通には考えられないほどである。

慣れるまでの異常な速度。……一夏の異常性を指し示す一端であった。

「もう慣れたのか……？ まったく……。私も大概イカレてるが、お前も負けず劣らずだ」

その事実、桜華にも呆れをもたらす程であった。

「来い……！」

今度こそしっかりと構え、桜華は言い放った。

「いきます……！」

それに応え、一夏が駆ける。

打ち合う音だけが響く。

一夏の攻撃は、一度たりとも桜華に届かない。その全てが或いは躲され、或いは防がれている。

距離が離れ、間をおかずに一夏は駆ける。

そして

「ぐう……っ！」

「え……？」

桜華の苦悶と、一夏の呆けた声が重なった。……何のことはない。端的に事実を示すなら、単に桜華が無防備に一夏の一撃を受けただけのことである。

「え……？　なん、で……？」

一夏は現実を認識できない。したくない。

「宿題だよ」

「しゅく、だい……？」

「剣を続けるつもりなら、この恐怖を乗り越えろ。……分かったか？」

「……分かった」

かなりの時間をおいて、一夏はようやくそれだけを口にした。

「それじゃあ、またな。……ああ、そうそう。今の一撃、実に良かった」

そう言っ て桜華は去った。…… 呆ける一夏をその場に 残して。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4466y/>

---

I S   V S   霊子甲冑

2011年11月17日19時23分発行